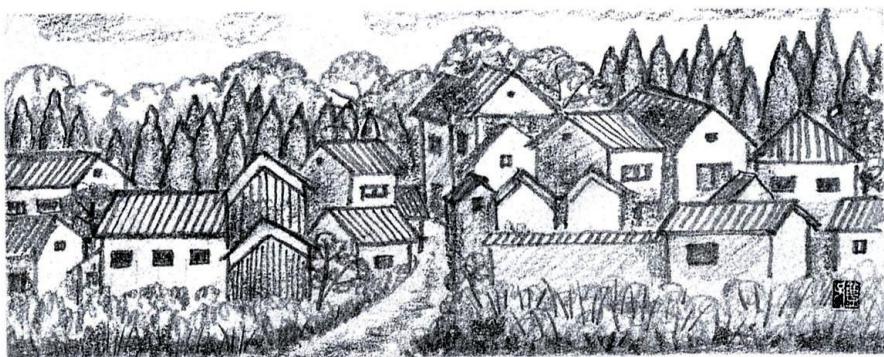


# やまざき文化

'95-2 \* No.14



山崎町文化協会



## "やまさき文化" 第十四号発刊に当たつて

山崎町文化協会会長 壱阪壽

一年が経つのは早いもので、ついこの間前年の "やまさき文化" を発刊したと思ったらもう今年度のを発刊せねばならなくなりました。

毎年内容も随分と充実してまいりました。それには編集委員の方々の大変なご努力は勿論であります、此の文化誌の刊行に大変御協力下さいました多くの方々にも深く感謝申し上げるものであります。地域での文化活動を盛んにすることは仲々難いことでありますし、その方法も色々あると思われますが、その地域の文化誌を創ることも一つの有力な方法だと思います。

特に山崎町のように文化協会の構成団体が二〇数団体になりますと、普段個々の団体がどんな活動をしているのかなかなか分り難いものであります。

芸能関係では春と秋二回公演をする機会がありますので、多少なりともその活動ぶりを察することが出来ますが、そのようなことの出来ない分野での文化活動では紙面を通じて紹介するより外に良い方法がありません。

ですから、"やまさき文化" には構成各団体の活動のレポートを始め文芸作品も掲載されていますので、随分多彩な内容になっています。

今後も内容の充実に向かって編集委員の皆さんの御盡力が続けられ、そして文化協会員のみならず、多くの町民の皆様に此の小冊子が愛され、親まれ、山崎の文化の向上に些かなりとも寄与することを切望してやみません。

### ◇ 目 次 ◇

やまさき文化第十四号発刊に当たつて 壱阪壽

『恨』の峰を超えて 安井道夫

『胎児の世界』という本

稻作雑感 河本泰

語学勉強のことなど 谷口清作

短歌 稲山千代

俳句 下谷厚

改訂播州穴粟郡守令交代記再復刻

植物同好会の活動について 大谷司郎

禅の思想について 尾島忠義

若者と邦楽について 杉本邦子

私たちのハーモニー 久宗丑雄

椿の想い出 朱山毅

臨書と創作 尾崎弘志

この一年を振り返って 田内龍陽

秀峯会より秀杉会へ 堀勇雄

河野鉄兜作鶴龜の詩 小川登

宇原の獅子舞 志水正信

書と私 山部桂翠

たかがさつき、されどさつき

草花に魅せられて 濱戸口正信

おどりへの追憶 藤村清一

事務局便り 荒木俊介

表紙画／カット／ 黒歴

尾崎正一 豊子

# 〈恨〉の峠を超えて

安井道夫

歩いてゆくよ、と決意を述べる。

彼が唄いながら、カメラの前にフレームアウトすると、赤茶けた道には一陣の風が舞う。その砂ぼこりさえ、私には喜びに満ち溢れているように感じられたのである。これは韓国映画、林權澤監督作品『風の丘を越えて 西便制（ソピヨンジエ）』の一場面で、映画は時代にとり残されつてある民俗芸能パンソリと運命を共にする広大（クワンデ）の親子の物語であるが、ここで、これほど美しく、楽しく唄われる民謡（アリラン）を聞いて、私はただごとでない思いに捉われてしまったのである。

一九六〇年代の初め、韓国全羅南道のある山間の村に、トンホという男が辿り着くところから物語ははじまる。盲目の姉を尋ねる遍歴と再会のドラマであるが、その苦難の物語の中ほどに次のようなシーンが挿入されている。

ゆるやかな斜面はいちめんの麦畑になっていて、その緑の中に赤茶けた一本の道が通っている。その道のはるかかなたから、親子らしい三人の旅芸人が唄いながら下ってくるのである。

アリアリラン スリスリラン アラリガナンネ

ヘエエ アリラン ナンナラリガ ナンネ

（ムンギヨンセ峠の なんたる険しいことよ

くねくねと 曲がりくねっては涙を誘う

唄とともに 流れゆく放浪の人生

積もり積もりし この〈恨〉をいかに晴さん・・・

父は、パジ・チョゴリにトルマギ（周衣）をはおり、頭にも白い帽子と、白衣民

族にふさわしい白無垢の衣装。チマ・チョゴリの娘は、白のチョゴリ（襦）に黒のチマ（裳）、息子はパジ・チョゴリに黒のチョッキ。その白と黒の対比が、田舎道の逆光の中で美しく戯れる。

唄は「珍島アリラン」。最初こそ民族の過去を象徴するかのように哀しくて、地を這うように唄われるが、近づくにつれて彼らの声調は喜びに変わっていく。立ち止まり、踊るように唄われるのは、父と娘の即興の掛け合いで、息子のたたく太鼓は弾みに弾み、その響きに苦しい過去は押しのけられ、哀しいまでに幸せな行く手のイメージが唄い込められるのである。

「金のごとく玉のごとく 愛しきわが娘よ 唄に精を出して 名人になれよ」と父。娘は、弟をいとおしみ、その太鼓の調べに乗って、はるかに続く唄の道をどこまでも

歩いていたが、ひとりは朝鮮人だということで、子供ごころに相当差別的な発言をしていた記憶がある。ぼろ買いだと離したてた嘘言葉もいまでは大方忘れ果ててしまい、彼ら家族が如何ような生活をしていたものやら不明で、男の顔さえ思い出すこともない。ただ、アリランの調べだけが彼らの記憶と重なり、いつまでも私の口の端に残り、この歌を聞くたびに当時の暗い雰囲気が悔恨とともに必ず甦ってくるのである。

当時私が誰知らず教えられたのは、

アリラン アリラン アラリヨ

アリラン コロゲ ノモカンド（アリラン 峠を越えて行く）

ナルル ポリゴ カシヌン ニムン（私を捨てて ゆく君は）

シムニド モツカソ パルビヨンナンダ（一里も行かずに 足にまめ）

と続くもので、「アリラン峠」が朝鮮のどこかにある地名ぐらいにしか思っておらず、まして植民地支配に消えなんとする民族意識へ活性の油をそそぎ続けた民謡であるなどと知るよしもなかった。

後日次のような出来を読んで驚いたのである。アリランは彼らの祖国、民族、民族魂などの喩えで、アリラン峠はその受難の危地の象徴だったという。そして私（祖国）を植民地支配者に売り渡す者は、一里も行かずに足にまめを作るよう、必ず挫折してしまうに違いないと、お互い警告し合った連帯の唄であったというのである。

さて、『風の丘を越えて 西便制』の中でもっとも頻繁に使われるのは〈恨〉といふ言葉であって、映画を見る間も、私は知らず知らずのうちにこの言葉に搦めとられ

てしまっているようだった。西洋にも東洋のどこにもない韓国固有のものだという

〈恨〉を求めて、いま私はこの物語を反芻してみようと思う。

北からまた南から外圧に苦しみ通した朝鮮民族の歴史について、常識的な意味での〈恨〉の材料にはことかかない。最近も、従軍慰安婦や労働者の強制連行などについて賠償責任が問題になっていて、そのことについて若い友人と議論したことがある。

友人の主張は、戦後五〇年も経つてからどうこう言わても、親父やまたその親父がやったことであって、われわれの世代には関係ないことだという。しかし、彼ら朝鮮民族の身体には近代「征韓論」以降の日本の侵略と植民地支配の悲惨ばかりではなく、豊臣秀吉の「壬辰倭乱」(文禄・慶長の役)や一三世紀のモンゴル侵入など五〇〇年前、六〇〇年前からの記憶が刻印されていて、私たち日本人のうかがい知ることのできないこころの奥底に蓄積され続けてきたのである。〈恨〉は、個人的なレベルを越えて、宿命的なものであると言われる所以である。

この〈恨〉の映画では、まず三十代のトンホが姉ソンファの探索の旅に出るところから映し出されるが、すぐにも幼児からの回想に移るので、舞台はトンホの年から逆算して一九三〇年代からはじまることがある。

ちょうど柳条湖事件(満洲事変)を契機として、日本の中国侵略への画策がおおっぴらになる時代で、朝鮮半島においても総動員政策があらゆる人たちの生活を翻弄はじめめる。それは「皇國臣民の誓詞」の強要、「創氏改名制度」、朝鮮語教育の全廃など、徴用・徵兵から言語道断な女子挺身隊(従軍慰安婦)の動員までに及び、民族的存亡をかけた受苦の時代を経験することになる。そうして、一九四五年八月一五日の日本敗戦による解放の喜びも束の間、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の二つの祖国への分断に続いては、朝鮮戦争の勃発。一九六一年に至ってはアメリカの介入による軍事クーデターで朴正熙政権の誕生へと、めまくるしい変転と苦難の時代が続いた。しかし、物語は彼ら家族の職能であるパンソリが、時代の奔流に取り残されてゆくさまを描くだけで、社会的事象は極度に抑えられて直接に描写されることはないのである。

物語の発端は、パンソリの名手でありながら、師匠から破門されるほどの頑固者ポンの、偶然の村への到着で、血のつながりのない姉弟、ソンファとトンホの放浪の旅は、この時運命づけられたようである。

旅芸人ユボンは到着した村の若い未亡人を愛し、その女トンホの母は燃えあがった

愛の中で産褥熱に犯されてあつけなくこの世を去ってしまう。男は、連れてきた女兒ソンファと残されたトンホの養い親となり、求道的ともいえる厳しさで、ふたりにパンソリの唄をたたき込もうとする。マダン(内庭)に面し、障子風扉の格子縞がくつきりと浮かびあがっている日溜りの縁、その縁側に父は太鼓で拍子をとりながら、繰り返し繰り返し口づてに唄を教える。

父はもって生まれた頑固さから、年齢のことなど眼中になく、ふたりに向かって痴癡の緒が切れ、怒りの花火が飛び散ることもしばしばであった。父はすでにパンソリの鬼になり、社会的には広大という低く賤しい場所にありながら、世間体や金銭の執着には無頓着になっていた。昔の仲間で出世した芸人から、華やかな舞台に立つよう誘われても断り続け、ただつもりつもつた〈恨〉を極め尽くすことだけに執着しているのである。

さて、朝鮮半島の芸術では、古来舞台と悲劇が発達しなかったといわれているが、パンソリも特別の施設を必要とせず、いくらかの聴衆の集まる場所さえ確保されればそれで足りた。中央に唱者の何歩か歩ける空間があり、その左側に鼓手が坐れたら、もうそれだけで行うことができたのである。

パンは場であり、ソリはレノとともに声楽を指すが、レノのように人の声に限定されず、鳥の鳴き声から水の音、風のさやさやきなど森羅万象の微妙な揺らぎまで表現できるといい、そのため多様な人間の情と恨を描出するにはまたとない技巧だといふことができる。

融通無碍の唱い手の派手さに比べ、鼓手の役割は地味のようと思われるが、「一に鼓手、二に名唱」といわれるほど鼓手は重要で、唱者を生かしも殺しもするほどの役割を荷なっているのである。それは唱者との一つの掛け合いで、三つ目の要素、聴衆の気息が加わって理想的なパンソリが完成する。

もう一つ、つけ加えておくと、この映画の舞台はもちろん、パンソリの発生地も光州市を中心とする全羅南道で、この地方は政治的にも、経済的にも疎外され通した後進地域であった。たとえば金大中氏事件で知られているように、地域差別主義の標的とされ、ここの中出身者は長い間蔑視され続け、特別視されることが多かった。いま旅芸人親子に、この蔑視が二重写しになるのである。

父と、姉と弟は、遊芸の旅に出る。食べる物もろくすっぽ手に入らない日々を送り、

そのせつなさの中でふたりの子供は成長していく。薬屋と組んで路上で唄ったり、ヤンバン（両班）たちの宴席に呼ばれることもあつたが、父の自負心の強さが災いして、必ずといっていいほど喧嘩別れになってしまふ。無報酬のまま、非情に迫いたてられることが多かった。

鼓手役のトンホは、そんな父の頑固さに我慢できず、その情熱の異常さに批判的になって行くのであるが、娘ソンファは父の期待に背かず、順調に才能を伸ばしていく。ユボンという厳しい〈鬼〉の腕に抱かれながらも、ソンファには何の不満も起こらない。ひもじさも貧しさも、唄さえあれば、すべてを忘れて幸せになれる、心の底から言うことができる。父の勧めにしたがつて夜戻となく唄に唄うソンファの姿は、パンソリの神に捧げられた生贊ながら可憐で、神秘性さえまとっているように見える。

トンホは、ソンファへの思慕が嵩じ、そんな父と娘の関係に嫉妬を感じ、ふたりの前から逃亡するように姿を消してしまうことになる。

ソンファはそのショックから声が出なくなり、ほとんど精神錯乱のような状態に落ち込んでしまう。三位一体で追求してきたはずの〈恨〉は、一本の糸の切れた凧のように目的を失つてただ虚空を漂うしかない。それは弦が切れ、音のない世界への流刑でもあつたのである。

しかし、それぐらいのことでのへこたれるような父ではない。娘の不幸に追いつかれるよう、娘の身体にさらなる苦悩を押しつけようとするのである。

父にとっての至上命令は芸を極め尽くすことであり、そのための生贊である娘は、何をおいてもパンソリの純粋化に奉仕せねばならない。ついに漢方薬を飲ませ、娘を盲目にしてしまう。

以後、ソンファたちの放浪は、父に手を引かれての移動となる。そんな中で、突然すばらしい映像にめぐり合う。

李朝・朝鮮以来、儒教が国教となつたため、半島の仏教寺院は山地に追いやられてしまつたという。そんな山中の廢屋に近い山寺にふたりは辿りつき父は視力と言葉を失つた娘の世話をなしてくれと行つてゐる。

娘は、木々の緑に閉まれた高樓の欄干にもたれ、あたかも刻々と変化する色調に見とれているふうにじっと夕焼け空に耳を傾けてゐる。空気の色まで朱色に染まつたと思われるとき、娘は側にいる父に向かって、もう一度唄をうたいたいと告げる。

夕靄の重さに時間まで擦んでしまつた静寂の中で、波のない水面にぱとりと針の落ちるよう、その言葉が現実の父のここに突きささる。びいんと張り詰めた空気のなかに、喜ばしい波紋が広がっていく。

最後に父の手に引かれて行つたのは人里離れた峠の廃屋。そこでは、ただただ唄の修業に明け暮れる。父は貧しい食事を作るかたわら、よつびて唄を伝授し、積もり積もつた〈恨〉を原動力として、ソンファが唄の奥義を極めるように全力を傾けるのである。

日夜一人が相対し、またソンファひとりが緑の山に向かつて根かぎりの声をぶつけることもある。

鳥の鳴き声がみち、時には吹雪が吹き込む寒氣があつても、ある意味では邪魔のない唄だけの世界が、ふたりの間に幸せそうに展開していたのかも知れない。

しかし、父の体力は衰えをみせはじめる。ある時村へ下つて門付けの投げ銭で手に入れたものだと、鶏一羽を持ち帰つてくる。唄には体力が必要だとばかり、娘に久しう振りの御馳走を勧めているとき、村人が上がつてきて、この鶏泥坊めとユボンはめつた打ちにされ、大けがをしたこともある。

ついに父は、娘に対する罪悪感をもち、それでも娘の唄が〈恨〉を超えつあることに希望を託して己は〈恨〉を抱いたままこの世を去つてしまう。

盲目のソンファひとりが残されるが、画面ではしばらくソンファの姿は隠され、姉を探して奔走するトンホの姿を追うことになる。まず、観客の意識は再び映画の冒頭まで連れ戻される。

トンホは鄙びた村はずれの「唄の居酒屋」に、今どき珍しくパンソリを唄う女がいると聞き出してきたのである。彼は女の唄に合わせ、太鼓を打ちながら、根掘り葉掘り盲目的パンソリ唱いの消息を聞き出そうと努力する画面である。なぜ娘は盲目になつたのか。彼は執拗にその間の事情を解きほごそつとするのだが、女は信じられないといった調子で、目がみえなくなつたところで本当に声がよくなるものでしようか、と氣のない返事をする。彼はもっと明確で、異常な動機があつたのではないかと疑つてゐるのである。

トンホはじりじりと照りつける麦畑の中の陽射しを感じながら、望まざして義父になつてしまつた幼い頃の、ユボンの唄声を耳許に聞いていたのである。

義父は途中から、トンホに唄を教えることを諦め、姉ばかりに唄を習わせた。しかし、姉が盲目にされながら、父に対して何の憎しみも抱いていなかつたと聞いて、トンホは余計に姉をいとおしく思うのである。

ソンファ探索の旅は、時流に忘れ去られた旧知の絵文字師ナクサンに会つたり、薬屋を訪れたりした後、靈光付近の塩田地帯の居酒屋の一室で、ついに姉と巡り合う。

そしてトンホはソンファに唄を請い、自らも鼓手となり、太鼓で長短（リズム）をとり離子や調子合わせも引き受ける。ソンファの技量はもはやパンソリの頂点を極め、腹の底から湧きあがるようなソリがあるかと思うと、姉々となまめき、ときには水面を行くなめらかな流れになり、突然ダイナミックなノルムセ（身ぶり物真似）にかわるといった調子。

夜を徹したふたりの掛け合いの弦は、ほとんどエロチックなまでに絡み合う。おそらくは、お互いにもう一つの父の弦を思い描きながら、この世とあの世の境を往来していたのに違いない。

〈恨〉を超えて、もはや何の痛みも何の悔恨も、悦楽さえない陶酔の境地であつたと思う。これこそ、「恨にも埋もれずに恨を超える」と教えた父ユボンの望んだ境地でもあつたであろう。

しかし、不思議なことに、翌朝トンホは姉に対して名乗らないままバスに乗つて去っていく。ソンファの方もあたかも予定の行動であるかのように、長年連れ添った居酒屋の男のもとから去っていく。真っ白な雪の中を、赤い服を着た童女に手を引かれ、あの世へ旅立っていくかのようなシーンで、映画は終わる。



以上が画面に現れた映像としての梗概である。

ところが林權澤監督は、この映画の中にいかにパンソリを「着せる」かということでもつとも腐心したようである。現在パンソリの辞説（脚本）として唄われているのは、わずかに五演目だけで、そのうち文学としても最高傑作とされる『春香歌』をベースとし、それに『沈清歌』と『興夫歌』を加え、物語素ことの映像シーンにモザイク状に挿入しようとした。

物語は物語を呼び、あたかも民族を超えて人びとの深層に横たわっている原型を刺激するかのように、次々と共鳴しあい、そこに物語以上のものを私たちに想起させようとするのである。

なぜ、私たちはそれほどまでに、いつか聞いた物語に引き付けられるのだろうか。現実には、聞いた覚えもないはずの物語でも、私の中にある謎めいた奥底で、かつての伝承に出会つたようになれ合いになり、共犯者的に納得してしまう節さえあるようである。

その物語のモザイクの一つ、身分を明さないままの最愛の者との再会は、『春香歌』の系列をなし、もう一つ父親への献身と盲目というテーマは『沈清歌』に連なっていく。そうして、その二つの系列がないまぜにモザイクを作り、混沌の印象を与えるほどあらゆる事象を包含し、最後のクライマックスでエロチックなまでに昂揚して、ひとつに昇華する。

「韓国の古典文学はパンソリで聞け」といわれるよう表現方法が散文になれば小説それが語りとして辞説となればパンソリの台本になる。

『春香伝』は李朝末期の作で、作者は当時行われていたあらゆる学問に精通し、それらを換骨奪胎、自由自在に操作して成立した軟文学で、日本人が『忠臣蔵』を愛するように、朝鮮民族に愛され続けた物語である。

まず、筋書きであるが、パンソリの辞説では、「絶世の佳人生まるるときは、江山の精氣を授かる。・・・それが精氣ひたに凝りて春香ぞ生まれる」と、演唱用だけに実に大げな美文調で始まる。母は官婢としての妓籍から身を引いた元妓生（キーセン）であるが、奇瑞によって出生した春香のため、代婢を納めて奴婢の身分から開放されている。四十を越えてから生まれた春香愛しさのあまり、身を隠すように暮らしており、春香を知るものも稀であった。

場所は、やはり全羅南道の南原。春香十六歳の春の盛り。所の名所広寒楼に上がつ

て花を愛で、詩を詠じていたのは、南原都護府・李使道（地方長官）の息子夢竜。これまた春香と同い年の十六歳。彼が四方を見回しているうちに、ふとブランコを漕ぐ

春香を目にし、その美しさと変幻自在な身のこなしに、「魂を抜かれしことく茫然と立ちすくみ」ひとめ惚れ、早速に下僕に命じて呼びにやらせる。

春香は、退妓の娘とはいえ士太夫の娘にもおとらず、そう簡単になびくような女ではない。下僕は、道令の毛並みのよさ、器量が衆に抜きんでていること、かならずや科挙も主席で及第され、末は長官間違いなし、と夢竜の宣伝にこれつとめ、このお方の寵姫になるならば、「着るものは綾羅錦繡、食うものは山海の珍味にて、お部屋さま、お小室さまとかしづかれて、外出の時はいつも独轎、こんなに良い話はあるまい」と、種々なだめすかしてみるものの、とんと反応がない。

とうとう夢竜自ら、春香の家まで乗り込み、母の許可を得て、百年偕老の約束を取り交わす証文を入れ、ようやく新郎、新婦の儀礼の「合歛の酒」にまで漕ぎ着ける。初夜の情景も、少々日本人には濃厚に過ぎるほど細やかに描写される。これが春香が〈恨〉を積むことになるそもそもものなり染めである。

幸せは短いもの。父府使の都への栄転が決まり、ふたりは生木をひき裂くような辛い別れを味わうことになる。夢竜は春香との関係を咎められ、戒めから脇部屋に軟禁され、春香には何一つ連絡できないまま出発してしまう。それを知った春香母娘は途中で待ち伏せ、「なんということじゃ、丈夫のすることとは、こんなものか。一枚の誓紙に契り結びのとき、百年偕老と言われたに、会うてより幾ばくか・・・」と難詰する。

江原道に『恨五百年』という、泣きの民謡といわれるほど哀調を帯びた唄がある。

恨多きこの世 つれなき君よ

そうして各節の終りに、「いかにもそうだよ そうだとも 恨みながらも五百年

今更言つてもしようがない」と、合の手が入る。

火のような炎々と燃えさかる怨みとは違って、〈恨〉はこのように冷たく、雪のように積もりに積もる悲しみだと言われるが、春香の場合の忍耐はもっと激しく抵抗として現れる。

別れより數十日の後には、はやくも好色の使道が赴任してくる。早々に妓生の点呼まするが、一人として気に入る女がない。噂に聞いていた春香の姿が見えないの

で、無理やり連れ出してさせ、春香に己の夜伽をさせようとする。

その時春香の言つた言葉は大膽不敵である。「節行には上下なし。天子も匹婦の貞節を奪いはできぬものなるに、使道はできるおつもりか。予譲を見習いて、二度目の男に操を立てよと仰せらるるとなら、使道もそれを見習いて、二君に仕うるおつもりか」と。

「使道、二君なる言葉を聞き、怒り心頭に発しけん」、使道の分別もどこへやら、春香を刑具に縛りつけ、執杖使令に命じて二十も三十もの杖打ちの刑を与え、半死の状態で刑房に放りこむ。

杖を打たれて「痛い」というのは、烈女にあらずと、歯を食いしばって一つ、二つと打たれることに、うめくようく唄った歌は、上の句は漢文、下の句は俗語。その上、上下の句とともに、打たれた数を唄に詠み込むという離れ業。たとえば六つ目が打たれると、「六房の下人に聞かせませ、戮屍されなば氣がすむや」・・八つ、「八面不当の邪ことを、あれこれほんばんおやりなされ」といった調子で、折檻をすればするほど春香の節操は固くなる。

こういうシーンは、古本に『烈女春香守節歌』があるように、烈女の操を宣伝するのに大いに役立つたかも知れないが、それよりも女たちの奥底に沈黙した〈恨〉をとき解す役割をになっていた。パンソリのカタルシスが、巫俗の作用と密接な関係のあることもだんだんと納得できるようになることである。

相手がいかに絶世の美人であるとはいえ、春香は妓生の娘。当時の「奴婢隨母法」によって、春香とて、やはり妓生をつとめるのが原則の社会。地方政府を往来する両班に侍寝する妓生に、「守庁」という言葉があつた当時、気に添わないといつても春香が新職卡使道の要求を拒否したことは尋常なことではなかつたのである。

厳格な階級の枠組みのなかで、それもよりによって当代一流の美男子で士太夫の娘たちの渴仰的であった貴公子夢竜が、蠅一匹の命にも劣るとされていた雛妓と連れ添うなど思いもよらぬ時代である。それが科挙に及第し、暗行御史に抜擢されて、再び獄中の春香に再会するまで貞操を守り通す一部始終の物語であるから、虐げられた人たちにとつてこれほど痛快な話もない。

「礼節とは、両班の邸にさえあればするものであり、妓女の賤家には貞節のあることも許されぬというのか」と、儒教的な階層社会に痛烈な批判を行つてはいるが、本当に作者がいいたいのは、ここでも△恨▽のこころについてである。杖打ちはする、投

獄はする、最後には春香の刑の執行まで望むほど横暴な新職使道についてさえ、脇役に押し退けねばならぬほどの愛の忍耐ばかりが表面に出、憎しみは△恨▽によつて薄められてしまう。

ようやくに身を明かした李夢竜によつて危機一髪助け出されても、『春香歌』には卞使道に対する復讐の話は出てこない。ここが、『春香伝』と日本の『忠臣蔵』との相違である。怨みは憎しみの子であり、〈恨〉の感情は愛につながっているというのである。

しかし、古典となつた物語といつものうはそつ一筋縄で色分けできるものではない。

映画撮影の途上、スタッフ一同が情景再現を求めて強行軍のハンティングをしたことがあつた。車の中では、チョ・サンヒヨル唄う『春香歌』が流れていた。五時間になんなんとする唄声の間、車内はしいんと静まり返り、林權澤監督は非常な不安に襲われたという。「私は無駄なことをしているのではないか」という後悔にも似た不安である。『春香歌』のなかには、「生と自然に関する比喩が美しく散りばめられ、恨の情感が韓國特有の諧謔によって表現される。その上確固とした構成に裏打ちされた辛辣な社会批判と歴史観にもことかかない」。ここには人間の喜怒哀楽の全てが折り込まれていると感嘆し、監督はその大きさに圧倒され、映画に『春香歌』を被せることの大それた試みを恥じたのである。

その圧倒された思いがあつたからこそ、映画は重厚さを増し、普段は知らないまま周辺に押しやられていた感情まで刺激されて、遠い記憶とこの見知らぬ物語とが通底していることの驚きを味わうことになる。

獄中の春香のもとに土地の妖怪が訪ねてきて、さまざまに語る凄惨な場面がある。弟トンホが失踪する寸前まで、薄暗闇の破屋の食うや食わずの限界状態の中で、ソンファが一心不乱に練習するのはこの「獄中歌」であった。獄舎の中で、日増しに募る悲しみ。「・・・垢にまみれし檻櫻まとい、蓬と見紛う乱れ髪、顔は鬼神のごとくして、わびしき獄房に独り坐し、思うは君のことのみぞ。会いたし、見たし、いとしき君。・・・雲となりて飛び行きたし。・・・指の血をとりて、わが窮状を手紙にせんか。肝腸の朽ちる水もて、君の姿を描かんか」。この春香の夢竜への思いは、立場こそ違え、トンホの姉ソンファへの思慕の激しさと重なっていく。

また、春香がみた恐ろしい夢の占いに、道行く盲人を獄舎に呼び入れるのは、ソン

ファに差し迫つた運命の予兆であり、『沈清歌』のライトモチーフの再現へと連なる。しかし、春香が待ちに待つてようやく目にすることができた夢竜の姿は、零落れた哀れな姿。洗いざらしの百姓着に、木綿のパジをはき、言つこともビント外れで誠意がない。

暗行御史とは、隠密で、地方の役人たちの行状を調査して歩く役目柄、己の母に問われても真実は一切語れない撻。春香を目の前にしてさえも、あらぬ作り事の身の上の話をせねばならない。ところが春香はさすがで、そんなつれない夢竜の言葉にも、眞実を直感しているようで、動じる気配がない。

次の日は、現職の卞使道の誕生祝いの宴会とて、その席上夢竜は暗行御史の身を明し、すべてはめでたく決着するといふ話。



さてもう一つのパンソリの演目は、『沈清歌』である。

生後七日目で母を失つた沈清は、盲目の父と二人の貧しい少女時代を送つてゐたが、十五歳になつた時父親の目が見えるようにと、神仏に願をかけ、寺院への供養米三〇〇石のために中国の船員に身を売ることになる。そうしてインダス河に人身御供として入水する。ところがその行為が天帝の愛でるところとなり、龍宮より再び現世に送り届けられ、ついに宋の皇帝の后になる。皇后になつた沈清は、父への思いやみがたく父探索の方法を考え出し、思いもよらぬ再会の驚愕に、ついに念願の父の目が開くといった概要で、他愛ない孝行綺談の外觀をもつ。

沈清の父を思う一途さと、その可憐な姿に比べると、清廉潔白であるべき父親の卑猥さが物語を逸脱している印象を与え、その雑駁さがまた別の面白さをかもし出している。

ここでも盲の父と母郭氏の間に子のない嘆きがあつた。神仏に祈願し、奇瑞によつてようやく懷胎する。ところが母は産後の肥立ちが悪く、死を覚悟。しかし盲目の夫

と乳飲み子の行く末を思うと、死ぬにも死にきれぬ悲しみがわき、沈清に最後の乳を含ませながら、父の将来を託さねばならない始末であった。

「絶え絶えに吐き出す息は、ひゅうひゅうと悲風となり、涙集めて降る雨は、身に沁むる涙雨となれり。さるほどに、ひくひくと、二度、三度、引き付くると見るうちに、ことりと息は切れたりける」と。

パンソリを聞くトンホの目には、ユボンが母を激しく押し倒して性行為にふけるさまと、産褥熱に犯されて激しく叫びながら息絶えていた母の遠い記憶が焼き付いていた。

トンホがソンファ探索の旅の最初に、峠の「唄の居酒屋」の女から聞いたのは、『沈清歌』の一節で、沈清の父が皇城への道をさまよい歩く場面である。

皇后に納まつた沈清が、一挙に父恋しさを募らせて、國中の盲人を都に呼び集め、盲のための宴を張ろうと津々浦々まで御触れを出す。それを知つて、父沈奉事(盲人)も皇城への旅に出るのである。

映画の原作は、李清俊『南道の人』から「西便制」と「唄の光」の二つの短編をとつたもので、この場面は次のようになつて記されている。

「——なにゆえ行くのか、なにゆえに、皇城への遠い道のりを

なにゆえに行くのか

今日はいづこに流れて眠るのか、明日はいづこに流れて眠るのか・・・  
しばらく重い沈黙のときが流れた。・・・女の唄は悠長で切ない晉陽調(チニヤンジョ)の調べを響かせていた。じっと目を閉じた男の叩きだす太鼓の拍子が、ときおりせきたてるよう女唄を追っていた。男はもう女の唄を聞いてはいなかつた。

『沈清歌』は、トンホの父親との関係をネガティヴに照射する。

目を閉じたトンホは、幼い頃の記憶の中で、父の唄を聞いていたのである。

「・・・いつからか少年は自分の手で、年配の父親と父親の唄を殺してやろうとひそかに計画を練っていた。母を殺したのは、まさに父親の唄だ」そのように、トンホには父親の唄ほど耐え難いものはなくなつていて、一方その唄を聞いていると、唄にはトンホの陰謀をすべて吸いとってしまうほどの魔力が感じられるのである。さらに不思議なことは、少年のこころの秘密を知つておりながら、父がそんな素振りひとつ見せないことであった。ときには、逆に向こうからその殺意を誘い込むようにして唄をうたうことすらあつた。

三人は見知らぬ山道を歩いていった。「・・・その日に限つて父親は歩いているときさえもその激しい声を休めなかつた。・・・秋の山は赤く色づき、谷間は遠くかすんでいた。父親はその山や谷間から湧きあがつてくる深い〈恨〉に導かれるよう、いつまでも唄いつづけていた」。

少年は、大きな石を抱えて、やつと疲れて横になつた父の背後にまわり、身構えた。父はその少年の姿を目にとめても、何も知らないふりをした。

トンホにとって父がなぜそんなふりをするのか、後々までも謎として残つた。ついにトンホはいたたまれなくなつて、二人の前から姿を消してしまつ。父親の呼ぶ声だけが、いつまでも森にこだまして響いていた。

「唄の居酒屋」での、トンホと女との会話はまだまだ続していく。

「それは、声をよくするために目に見えなくしたという話についてですか」と女。

「声のこともありますが、唄を大成させるためには、唄う人の心に言葉では表わせない〈恨〉を植えつけるという、そんな・・・」と男。女はひとの噂ではそういう話だと相づちをうつ。

「では〈恨〉を植えつけるために、父親が娘の目を奪つたというのですか」という女の問いに、男は自分に言い聞かせるように話しかじめた。ひとの〈恨〉といふものは、そんな故意に外部から植えつけようとしても、植えつけられるものではない。人生といふ長い長い年月を生き抜く間に、ほこりのようになつて形成されていくもの。ある人たちにとっては、生きることが〈恨〉を積むことであり、〈恨〉を積むこと

が生きることと同意語であるのではないか、と。

そうして、「いづれにせよ、娘さんが父親を許したというのは幸せなことだったかも知れません。父親のためにも、娘さん自身のためにも・・・。娘さんが父親を許すことができなければ、その思いはまさに怨念になり、唄のための〈恨〉にはなりえないではありませんか。父親を許したからこそ、娘さんの〈恨〉は、いっそう深まつたのでしょうか・・・」と男はつけ加えた。

小さな村の中でも、とくにひっそりとした川岸寄りに閑散な雰囲気を漂わせてその居酒屋はあつた。

映画は、名乗らないまま、姉と弟がパンソリの演唱によって、積もり積もつた〈恨〉をとき解していくクライマックスへ一挙に進んでいく。

その居酒屋に、奇麗にも泊まりたいという男は、女主人に対し、もしあなたさえよければ一晩中でも聞いていたいと唄を所望する。そんな申出は、今時一年に一度あるかないかの稀な注文で、女は戸まどい、最初はからかわれたような薄い忿懣の色さえ浮かべたのである。

男の二度目の申出に、女は観念してチマ・チョゴリに着替え、身繕いして見えない男の前に座った。

女は太鼓を抱きかかえ、もつとも安定感のある長短<sup>ナランダン</sup>、チュンモリの拍子を添えながら唄はじめた。男は女に合わせるかのように目をつむり、じっと聞き耳を立てていた。女の唄に力がこもっていくに従って、男の息づかいまで乱れて行き、自然と額から汗がこぼれてきた。

男は、短歌に聞き惚れながら、もつと本格的な『春香歌』や『沈清歌』のようなものを唄ってくれるよう願った。女は男がそんなにまで唄が好きになったのは、きっと何かのきっかけがあるはず、どんなきっかけがあつたのか話してほしいと興味を示はじめた。

女は突然決心したように、それでは夜明けまで私の唄を聞かせましようと申し出る。そうしてお互いが、熱い太陽がぎらぎら照り付ける幼児の記憶を手繕い寄せながら、対話の一つ一つに花火をちらし、ある予感に耐えに耐えている自分たちを感じるようになっていた。

女は突然決心したように、それでは夜明けまで私の唄を聞かせましようと申し出る。そうして、黙って太鼓とバチを男に渡した。男は長いことバチを握っていないので躊躇したが、女はあくまでそれを強要しているようだった。そうして、夜を徹して、疲れを知らない唄がはじまつたのである。

パンソリの唱調は複雑で、まず平調からはじまって、内面的な悲しみや慟哭する激しい悔恨は、哀愁を帯びた界面調で、そうして雄々しく威厳を表わし、高い格調が要求されるときは羽調というふうに変化する。

流派は、東便制<sup>ドウモンジツ</sup>と西便制に大別されるが、ソンファの唄う西便制は界面調の傾向が強く、柔軟、哀切な唄いぶりで、技巧と修飾のために激しい修行が要求されているようである。

沈清は七つになると、父を残してひとり物乞いに出る。

白雲

寒空、冬の日（千山に鳥の飛ぶも絶えたる）ころ、懸鶴（やぶれごろも）を身にまとい、肌はまだに色失い、寒空に素足を入れし古草鞋、瓢を脇にさし挟み、炊きの煙の吐く家を訪ね行きては乞う言葉・・・

トンホは、寒風に吹きさらされて、鳥肌がたつ心地。たとえ三人連れ立つての遊芸云とほいえ、吹雪の中のあてもない旅が続いていた。

ソンファの唄は続く。「・・・たとえ死ぬとも、魂なりと、母さまのお顔は見たいが、母さまのお顔はわたしが知らず、わたしの顔は母さまが御存知ないゆえ、互いはいぶかり合おうもの。まして、水と陸とに別れては、魂すらも会えますまい。・・・」物語の進行とともに、お互いの体が触れない今まで、唄と拍子がからみ合い、きつく抱き合うかと思うと、そつと離れ、父親の気配を伺い、安心するよう再び寄添う。

相手を思う優しさが、たくましい気迫に変わり、目の前に山なす荒波が被いかぶさつてきて、唄は激し、「狂風 大いに起こり、荒波逆巻きて、霹靂のごとく迫る声、山川覆えさんとするばかり。泰山のごとき大波は、天を呑まんとするばかり。・・・沈清には沐浴させ。素服淨らに纏わせて、祭壇の前へ静かに坐らせし後、船頭が祭文を読み上ぐる。・・・太鼓をドンドン打ち鳴らし、「沈清よ、今じゃ。さあ早う、海に入ってくれ」。船首に出づれば、海は真っ青、風はびゅうびゅう、風浪大いに荒れ狂い、舷を打つ音はげし」。ソンファは沈清になりきったかのよう、激しい身ぶりをともない、トンホも負けじとばかり太鼓の長短に合わせ、チュイムセ（囁言葉）を素早く投げかける。

ふたりの氣息はひとつになって、いよいよ高揚する。このクレシェンドで、もはや苦痛も悦楽も、あらゆる物語も、父のかけさえその中に溶解してしまって、無に帰した趣であった。

「・・・船首へさつと進み出て、蒼々たる大海原へ、わが家の如く、ざんぶと入れば、瞬く間に風は止み、波も静まりかえりたり」。

ようやく暴風雨も收まり、界面調に転調すると、唄は鳥のさえづりの中、花々を愛するような風になつて、静かに吹き抜けていく。

このようにして〈恨〉が解き放されたのなら、トンホはソンファに挨拶一つせずに、何ごともなかつたような顔つきで、そつと出していくシーンも納得できる。ソンファが赤い服の童子に手を引かれ、雪道を行くラストシーンはそのことを象徴している。映

画はここで終わらなければならないのである。

しかし、原作の「唄の光」では「恨」は解かれず、お互いの「恨」に触れないまま、相手の「恨」をいとおしむあまり、それを奪う方法を講じないまま静かに別れて行くのである。

「この世には、自分が背負った「恨」という魂を大切にいたわり、それを少しずつ消化しながら生きしていく人間がいる」と宿の主人は言う。

ソンファ自身も、あなたの弟さんも、私もその手の人間だというのである。

そうして、「おまえのように「恨」によって唄の境地が開け、「恨」によって声に深みができた者にとってはなおさら「恨」を大切にせよ」ともいう

原作者、李清俊は、この美しい場面で、「恨」を殺さなかつたために、続編「仙鶴洞の旅人」を書き継ぎ、ソンファの死を見届けることができたのである。

いまも韓国には「恨」を越え行くべき恨の峠、「アリラン峠」があるという。

参考 申存孝『パンソリ 春香歌・沈晴歌他』(東洋文庫 平凡社) 及

び李清俊『風の丘を越えて 西便制』(ハヤカワ文庫) より引用。

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、  
ご案内申しあげます。

## 第十六回春の芸能祭ご案内

日 時 平成七年五月十四日（日）

午前十時から  
午後三時まで

場 所 サンホールやまさき(山崎文化会館)

主 催 サンホールやまさき(山崎文化会館)  
山崎文化協会

後 援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

参加部門 山崎詩舞道連盟  
山崎謡曲同好会  
山崎郷土芸能保存会  
山崎邦楽邦舞研究会  
さつき民踊グループ  
(芸能祭実行委員会)

# 『胎児の世界』という本

山崎文学会 町 悅子

人は若いときに一つの職業につくと、大抵の場合は同じ職業を何十年も続けることになります。するとその職業に関してはエキスパートになることができますが、他の分野については殆んど知らないということになりますがちです。自分がこのようなバランスを欠いた人間でいるというのは何故か大変に気持が悪いので、近頃はなるべく自分の仕事とは関係のない分野の本を読むことにしています。

ある人間工学の中に「ヴァイオリンは不完全な楽器で、エレクトーンは完全に近い楽器である」と書いてあったので驚いたことがあります。もしそうであれば古今のヴァイオリンのための数々の名曲や、ストラディヴィリウスやガルネリウスのような何億円もする名器が存在する筈がないのですから。この本を書かれた工学博士は、楽器を演奏するということを工場でロボットが自動車の部品か何かを作るのと同じ様に考えられたのだと思います。

しかし自分で本を選んでいたのでは、やはり範囲が限られてしまうので、ある大学の哲学の先生に教えていたいのが、三木成夫 著「胎児の世界」（中公新書691）です。読んでみると面白いのが、本当に驚くべき内容でした。

この著者は東大医学部出身の解剖学者で、心臓の奇形を研究しているうちに、それらは人間との共通の祖先から枝分れした動物（硬骨魚類、両生類、爬虫類、哺乳類）の型であることに気づき、そこから発生学的な調査を始められ、心臓が動きだしてから四日目の鶏の胎児のもつエラの血管が両生類の肺の血管へ、さらに爬虫類のものへと変化し、同時に肺静脈も硬骨魚類の原始の静脈から浮袋の静脈にいたるまでのものが一せいに現れ、しかもそれらが次第に消えてゆく、そのはげしい変化が一日たたらずの間に行われ、胎児はその間瀕死の状態になり、それがすぎるとまた元気になる——

これははどういうことかというと、古生代に起った地殻の隆起によって海に住んでいた動物たちは陸への移動を余儀なくされ、エラの一部から肺を造り、それで空気を呼吸するというすごいことを多数の落ちこぼれを出しながら必死に、一億年もかかってやりとげた、その圧縮された再現である——ということを研究されました。

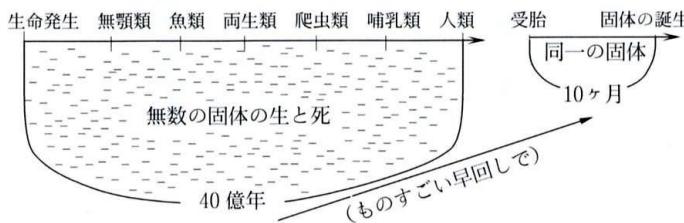
では人間においてはどうでしょうか。少なからず氣味の悪いことです、受胎後三十二日ごろの人間の胎児はフカの顔をしており、三十四日目は爬虫類、三十八日目はもう哺乳類の顔になっている、と書かれています。

「ちょうど二人目の赤ん坊が女房のお腹でできましたとき、私は日数を何度も数え直し、その時がくるのを待ちました。三十日をすぎた頃から、やはり何となく顔つきに茫洋とした雰囲気が漂ってくる。やがてあの爬虫類の三十六日がやってきますと、ついに“つわり”が始まつたのです。拒絶反応なんぞといわれますが、そんな単純なものではない。あの古生代の終りの一億年をかけた上陸の歴史が、まさに母親の体を舞台に、激しく繰り展げられている。母親はじっとそれを抱えこんでいるのです。そして哺乳類

の三十八日がきたとき、とうとうダウンしました。黙つて床をとつて一日中横になつていました。私はただ啞然として、それを眺めていたのです。」

この本は古生物学、形態学、比較解剖学などを網羅して書かれた、内容の大きな本ですが、分かり易く、先に述べた部分などは、劇的といつてもいいと思います。これはダーウィンのお弟子さんであったケッヘルという学者が「固体発生は系統発生の短い反復である」といったそのことです。つまり動物の胎児は生物が発生した時から現在に至るまでの進化の過程を、受胎した時から母親のお腹の中で全てやり遂げて生まれてくる、ということなのです。わたしの思ひつきですが図を書いてみました。

これからお父さんやお母さんになられる若い方々にこの本を読んでいただきたいと思って、この文を書きました。



# 稻作雑感

農学博士 河本泰（山崎町青木出身）

農業試験場等で土壤肥料と作物生産の試験研究に携わって四十数年になりますが、稲作技術も著しく進歩しました。時代と共にそのキーワードは、多収穫、機械化、良質化、省力化、コスト低減、あるいは今日の環境保全にまつわる問題、安全性等と変わり変わっていますが、これらは一貫して生産性向上のもとに行われてきました。それにしましても農業は天候に大きく支配される産業だけに生産への難しさがあります。昨年（平成五年）は冷夏長雨、それに台風で全国の作況指数は七十四の大凶作でした。

広島も著しい不作となつたことから、「今年（六年）も冷夏が来ることもあり得る」という気象予報官や農業気象関係者の一致した意見であったので、今年の六月まで昨年の二の舞を踏まないよう冷夏における稲作指導に力を入れてきました。しかし、この夏は誰も予想しなかつたであろう猛暑、少雨の昨年とは真対の異常気象となり、稲作も干ばつ対策におわれました。水が不足しなかつた所では豊作となり、水が大きくなり収量を分けました。全国の作況指数も一〇九（十月十五日現在）の大豊作と打って変わった年となりました。稲作技術の進歩は生育を多少コントロールすることが可能であつても、天候が生産をより大きく左右し、ままならぬことを改めて知らされました。

稲作の重労働からの解放、省力化は随分進み、現在は昭和三十年頃の労働時間の八程度まで短縮されています。これには農業機械や除草剤によるところが大きいが、今後は更に栽培様式の変革等によって省力化されることでしょう。私が関わっている水稻の施肥についても、従来の四回施肥を基肥一回で十分効果を發揮する緩効性一発型肥料が普及はじめています。先般、東京で省力施肥についてのセミナーが開かれ、私も兵庫を含む山陽地方の基肥一発施肥の効果と普及について発表しました。また、最近は、箱育苗による稚苗移植栽培になつていますが、新肥料を用い、育苗箱に肥料の全量を入れ、田植と同時に施肥をし、後は一切施肥をしない方法を試みたところ、収量も良く、普及の可能性が見られたのでこの春学会に発表しました。これらの新肥

料は作物への吸収効率もよく、省力でこれから施肥技術と考えています。

ところで、近年、地球の温暖化や酸性雨、地下水汚染など、環境破壊や人の健康に及ぼすことが地球規模で顕在化しています。農業においても農薬、化学肥料が樽玉に上がり、環境保全型農業へ唱導されていますが、稲作の場合肥料が環境に及ぼす影響は極めて小さいと言えます。なぜなら、稲作の施肥量は園芸作物の1/1000少なく、施肥期には施肥した窒素肥料はほとんど残っていないこと、また、稲は水を張つて栽培するので土壤中で硝酸への変化が少なく、地下水の硝酸塩の汚染にならないなど、環境保全の面から見ても有利な作物と言えるでしょう。

いま、主食である米は大きな節目に立ち至っています。国際化時代、「米も例外ではない」とし、昨年（平成五年）ウルグアイ・ラウンドの農業合意によつて平成七年より約四十万トンの輸入開始、その五年後には約八十万トン、これは中国地方五県の生産量に匹敵する大変な数字であり米の市場開放は待つなしで、自由化の圧力が及んできています。今までも現在の穀物自給率は二十九%と落ち込み先進国中最も低く推移しています。また昨年は米の大凶作のため緊急輸入しましたが、米の市場開放となると、輸出国は日本向けに農薬や化学肥料の多投によって大幅な増収を図るが、そのうち土地は荒れ、収量低下ば必至と見られ、また、気象災害などから持続的安定輸出の保証は望め得ないでしょう。

ひるがえつて、国内農業は生産者の高齢化、担い手不足などで耕地面積は年々減少し、特に中山間の田畠の荒廃があちらこちらで見られます。私たちは改めて農村の良さ、農業の必要性を理解するときに來ているのではないかでしょうか。農村の景観は勿論のこと、水の大きな受皿の保全機能等、直接間接に私たちの生活に大きな関わりを持っています。

もつと／＼国民が農村への関心を高め、米の自由化に依存することなく、穀物自給率を大幅に増加させ、美しい豊かな国土にするよう生産者、消費者共々共通の認識を持ちたいものです。

## 筆者のプロフィール

農林省中国農業試験場、広島県立農業試験場において水稻の施肥改善の研究に携わる。現在広島県立経済連勤務

著書「水田土壤学」  
「水田土壤とリン酸」など

# 語学勉強のことなど

警察庁長官官房国際部国際第二課長 谷 清作

(山崎町上北地出身)

警察庁という役所に入つてから二十一年目になる。入庁当時は予想もしなかったことであるが、国際畠が長くなつた。国際刑事課長の二年間や、イタリアでの日本大使館一等書記官としての三年間の勤務を合計すれば、警察庁勤務の半分以上が国際関係ということになる。国際関係といえば当然英語その他の外国語の会話能力が必要とされるわけであり、田舎者ちの私には大変荷が重かつた。事実、昭和四十九年入庁には英語さえもろくろく喋れなかつた。しかし、だからといって負けるのも悔しいので暇を見つけては勉強に励み、現在は、英、仏、独のほか伊、西、中国語までほぼ問題なく話せるようになっている。

いろいろな語学を勉強したおかげで、イタリア勤務時代には、大使館にイタリア語ができる者があまりいないということで、おりから訪伊中の浩宮殿下(現皇太子)の通訳兼ご案内の重責を果たす機会を得ることもできた。先日イタリアのローマで開催された第六十三回ICPO総会に出席した際に、各国の代表と旧交を温めることができたのも外国語勉強のおかげであつたといふことができる。特にドイツのBKA(日本警察に当たる)のハンス・ザッハルト長官とは、奥様ともどもローマ市内の日本料理店に招待し四方山話に花が咲いた。ザッハルト長官はおばあさんが、当時日本の旧制松本高校でドイツ語を教えていたザッハルト教授と結婚した日本人婦人であり、日本人の血が4/4入っていることから大変な日本顔である。ドイツ語は私の使える外国语の中ではあまり良いほうではないが、食事の席での話でもあり、ほとんど問題なく会話を楽しむことができた。同氏は英語はもちろん喋れるが、やはり自國語で話すことの方が数段楽しい様子であった。

またICPO事務総局のナンバー1であるジェネルー警察局長ともいろいろ仕事の打ち合わせをすることとなつたが、この人はカナダ王立騎馬警官隊の出身であり、カナダのフランス語圏出身であることから、英語での会話に所々フランス語が入るので注意して聞く必要がある。会議の主催国であるイタリア国家警察のボルタッチオ国際局長はもちろん習い覚えたイタリア語で挨拶した。

これだけ多くの外国语を話す人間は警察庁にはもちろんないし、多分、外務省に

もないと思う。ときどき人から「子供のときから外国语暮らしをされていたのですか」とか「さぞかし大変な勉強をされたのでしょうか」といった質問を受けることがあるが、十五才まで、草深い田舎を出た機会はほとんどなかつたし、社会に出てからも特に苦労して語学を勉強した記憶はない。しかし、社会に入つてからの言葉の勉強と学生時代の勉強で根本的に違つてゐるところがふたつある。第一は、その言葉が誰と、何時、何について話すときに必要かということがほぼ分かっていること、第二は教えてくれる先生がその国人の人間であり、従つて正しい、美しい発音で教えてくれるということである。

言葉の勉強というのは単純な記憶作業の繰り返しが面白いものではない。しかしそれが仕事の成果を左右するとなれば自ら意気込みも違つてくる。交渉の中で使われそうな單語、表現について予め予測し徹底的に調べておけば、それらが出てきたときには、推理小説の犯人を当てるような面白みもある。また、美しい響きを持つ言葉を暗唱するのは、美しいメロディーを歌うのに似た歓びがある。都会出身者と違うあまり遊びを知らない私にとっては格好のひまつぶしであつた面もある。

要は、退屈なことでも、それが必要であれば、いかに楽しく感じられるよう努力するかに掛かっていると思う。また、よく言われるように、ひとつずつ言葉をマスターすればそれと親戚関係にある他の外国语の履修は比較的容易である。イタリア在勤の際も、それまで習得していたスペイン語とあまりに似ているのに驚いた。日本語でいえば、九州弁と東北弁の違いより小さいといえるだろう。

それやこれやで、私の場合は、いさかかマニア的に使える語学の数を殖やしてきたといえるところもある。しかし、いまやその知識が大いに私を助けてくれている。

ここ数年、東京その他大都市の国際化は目を見張らせるものがあり、私の官舎がある新宿、高田馬場付近も朝夕の通勤時に日本語学校へ通うらしい中国人の雜踏で、まるで昨年夏に訪問した北京をもおもわせる状況になつてゐる。

我が国は国際化が進む中、外国人による犯罪が急激に増加するなど、我が国は警察も早急な国際化を迫られている。その中で自分の特技が生かされるならばこれ以上の幸せはないというべきであり、これからも語学学習の精進を続けるつもりである。

筆者のプロフィール  
京都大学法科卒業  
公務員上級試験甲種合格  
警察庁入庁(昭和49年)  
警察大学校卒業  
香港中央大学留学、メキシコ、ガナハット大学法科一等  
イタリア日本大使館  
記官3年勤務  
現在警察庁長官官房国際部  
国際第二課長(警視長)

# 短歌

藤村省三遺歌集

## 『対偶以

後

栗山節子

「自らの手で歌集を編むことも、或い

はこれが最後になるかもしれない」これ

は第五集『対偶』のあとがきに記された

一節である。この言葉がまさに覆えされ

んとして準備されていた第六集が遺歌集

『対偶以後』として、一周忌を前に御遺

族の手で出版された。藤村省三氏七十九

歳から八十三歳の逝去直前までの作品八

二六首が年代別に納められている。

目に見えて意欲ひゆく日々を炬燵

にゐても年をとるなり

話すことも無くなりて夕潮の輝きに

向く石に並べり

朝の書齋に入り来し妻が言ふことを  
忘れて暫しうて出でゆけり  
子ら孫ら離りて住める老耄のよろこ  
びはみな食につながる

老妻をけふはソファーに休ませて買  
物袋もちて出でゆく  
朝八時起き来ぬ妻を待ちかねてレン  
ジに粥の鍋かけにけり  
ともに老い衰へながら愚痴言はぬ妻

抄出の歌は常に死と隣り合わせの日々  
の寂寥と、老夫婦の温かい息息がれん  
なく表出されている。斐譲として歌の道  
を全うされた氏の知られざる一面を垣間  
見る思いがする。

いまだ目の見えぬみどり児み仏のあ  
やし給へば微笑みてをり  
笑顔よきみどり児高くさしあげて身  
に響りいづる歎びのあり  
みどり児の罪なき顔を見つめをり恥  
多かりし一生忘れて

氏は六人の曾孫をこよなく慈しみ多く  
の秀歌を詠まれている。血のつながる曾  
孫の誕生は身に響くよろこびであり、新  
らしい生命への喜悦の歌である。

何見ても何を聞きても反応のなき脳  
となり歌が作れぬ  
幾度か蛇口の水に手を洗ひこころし  
づめて歌が作れぬ  
向ひ家の壁に灼けつく日の反射見つ  
めて呆と歌が作れぬ

八首すべて「歌が作れぬ」を結句に据  
えて詠み、嘆きとはうらはらに氣力溢れ  
る一連は集中に異彩を放っている。

脳梗塞のわが想にありありと尖り  
て並ぶ鉛筆の芯

十六夜の月のひかりに身は濡れて死  
人のごとく眼を開きをり

脳梗塞を好みながらも研ぎ澄まされた感  
性は衰える事なく永眠された感

も余りある逝去であった。茲に師の足跡  
を偲び遺歌集の紹介とさせていただく。

ss

夢にのみ見えたまふ師となりましぬ夏  
過ぎて秋の光も深みつつ

稻村幸子歌集

## 『西鹿沢』

いくたびの  
花に遭ひしや  
山崎きよ子

稻村幸子様の歌集『西鹿沢』は昭和五  
十七年に出版された『芋環集』に次ぐ第  
二歌集で、その間約十年間の作品を自選  
されたものである。歌集の見開きには著  
者の師である岡部文夫氏の『宍粟郡西鹿  
沢といふところさみしき峠の村にかあら  
む』が置かれている。この歌は氏の第十  
九歌集『雪代』の中に収められている一  
首で、これを見ても著者の才能や人柄を

いかに高く評価されていたかが伺える。  
わが町を峠の村かと詠ましける六十四  
頁いくたびひらく  
冬早く越の山山雪降ると歌に読みつつ  
ひたこほしけれ  
雪道に迷ひし日より三年経ていま訪ふ  
門の木槿むらさき

著者も又応えるようこう詠まれている。

冬早く越の山山雪降ると歌に読みつつ  
ひたこほしけれ  
雪道に迷ひし日より三年経ていま訪ふ

著者も又応えるようこう詠まれている。

く刹那の音はあるべし

二十四サイズの靴に踏みしむる土よ木

草よ風よ光よ

みずみずしい感性のほとばしりを見る

ようなこれらの歌を、參寿を超えた

方の作品と誰が想像するだろう。

いくたびの花に遭ひしや八十年は茫茫々

としてことしのさくら

天つの砂丘に昏らみゆくときをひと

つラクダは何を想へる

織細清澄の歌人と言われる稻村幸子様

を、この度は別の面から見て見たいと思つた。その為に多くの香歌を紹介できなかつた悔いはあるが、此の集の流れの中に清

艶とも言うべき、もう一つの魂を覗ることの出来たのは大きな喜びであった。

## 各地短歌祭入賞入選作品

### ・波賀町教育委員会賞

過疎の地にイギリス人が住み着きてた  
どろたどろに早苗植ゑゆく

田峰 定子

### ・宍粟郡文化協会連絡協議会賞

未熟児に生れし少女一輪車自在にこぎ  
て青葉道ゆく

小倉 法子

### ・波賀町文化協会賞

やはらかく指にさぐる芋環の芽生えい  
くつか点字のごとし

森谷 康弘

### ・ハリマ農業協同組合長賞

男ともみゆるおみなが旗を振る下水工  
事の片邊を急ぐ

小林 郁子

### ・宍粟郡歌人連盟賞

鞭打たれ参道登る馬車馬の栗毛の背に  
噴く汗光る

進藤てる子

### ・入選

かそかななる音してあかき風車水子地蔵  
のかたへにまはる

伊藤まさ子

### ・入選

米ぬかを燃して蚊やりをする煙廻のひ  
さしを這ひて籠れり

中田 博子

### ・佳作

己が身を絞る苦汁に沈みつつ梅は日毎  
に皺みゆくなり

名賀 常磐

### ・佳作

かたちに両の掌あはす 森本萬千子  
すっぽりと田の面を覆ふ雪の上足埋め  
つつ鴉が歩む

太田 貞子

### ・佳作

注連縄を綱ひゆく夫のおのづから祈る  
（九月四日・波賀町民センター）

### ◇第十三回宍粟郡民短歌祭

波賀町長賞

出したる手を占い師に視られつつ言葉

にもろき心が動く 安東はつ子

## ◇西播磨短歌祭

### 十一月十二日・西播磨文化会館

### ・西播磨文化協会連絡協議会長賞

男らの凝視のうちに大池の最後の水が  
水門を落つ

森谷 康弘

### ・獎励賞

早朝の部落放送若者の逝去を告げてた  
因は言はず

篠本 久子

### ・入選

苛立ちを繕ひ応待する客の選りし口紅  
燃え立つレッド

小倉 法子

### ・入選

去勢麻酔に四肢投げ出す牛の仔が意識  
定かな眼見開く

中田 博子

### ・入選

生コソをやまず吐きるミキサー車ね  
だかまりなど人間のこと

森本萬千子

### ・入選

今一度師に会ひたかり遺歌集を読み終  
へしばし眼をつむる

新井 慶子

### ◆藤村省三先生を偲びて

#### 新樹短歌会

（十月十六日）

八十三今年は死なぬと逝きました師へ  
の想ひは日毎に深し

在賀 彦一

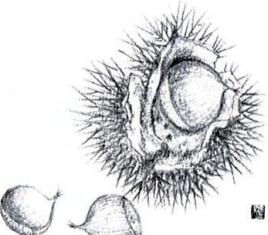
師と並びベンチに甘酒すりたる綾部

山行忘がたしも

教はりし歌の心の身に沁みて初盆の師

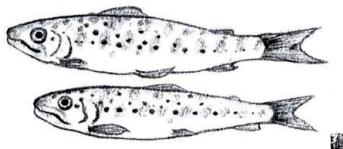
に遠く掌合はす

伊東まさ子



図

「対偶以後」の一首一首に今は亡き師の声聞きて涙のにじむ 太田 貞子  
拙くとも歌よむ執念持ち得しは師の賜物と写真に向ふ 小倉 法子  
哀しみを歌に継りて耐へてこそ歳月あるも師は知り給ふ 釜村 靖子  
耕せる暇惜しみて詠みゆけと宣らしたる師の遺歌集重し 日下ふさゑ  
在りし日に凭れるましし簾の椅子窓みに吾も坐りてみたし 倉田美代子  
希はれし頃師の逝き給ふ紅葉の季巡り来ぬ想ひ新たに 小林 郁子  
今は亡き師の好まれし白き花白玉椿咲き初めにけり 佐々木タエ子  
素直なる歌を詠めよの在りし日の師のみ教へを土台となし 畠峰 定子  
花買ひてなど持ちくるな採れし菜を何にても良しと添削給ひき 中田 博子  
黙もくと朱筆たまひし師の影の終の歌稿に思ひ深しも 富和かず子  
馳け寄りて吾等の傍に立たす師は記念撮影のカメラマンなりし 森 つな  
添削の終れば先生伴へる幼に優しき目を向けましき 安政 嘉子  
ことのほか秋の季節を好まれし師を偲びつつ落葉踏みゆく 北 隆治  
み教へを各もに各もに統け来て師の一周忌み声ききだし 山本 千代  
師の声とおもひ縊く遺歌集のしみじみとして心に韻く 安東はつ子



ゆきまどふ我に届ける師のみ声遣し給ひき数々のうた 栗山 節子  
あさ開きよるも縊く遺歌集に鎧はず詠めと師の声のする 森本萬千子  
読み返す五十二年の春季号わが歌集評に師の声を聞く 山本 静江  
一年の過ぎゆき早し悲しみのあとかたもなく芙蓉花咲く 友延かほり

## 短歌隨想

稻村幸子

### 一 桜幻 想

満開の桜を見下ろす鹿沢城跡本丸角櫓跡のほとり、莫塵敷き延べてのささやかな歌宴である。此處に藩主の邸へ通じる

埋御門（うすめごもん）があつたと刻んだ石柱が建ち、何故かその石柱が中どころから真二つに折れ、上部半分が地に倒れ雨上がりの土にまみれている。

城と桜とそして無惨に折れた石柱とが連想を呼んで、ふと、赤穂城主浅野内匠頭長矩公を偲び、その辞世と伝えられる歌を思い浮かべた。

風さそふ花よりもなほわれはまた春の名残をいかにとやせむ

尽きせぬ未練を胸に置んで綴られた哀れにも美しい現世への訣別の歌である。

古來、死の予感、或いは死の決意、又は、罪科による死の宣告を前に、幾人の人が万斛の思いをこの三十一文字に託したことであろう。思えば不思議な韻律である。

千三百年の昔より、日本人の血の中に脈々と流れ、吸う息吐く息と共に美しい

韻律となつて今生の際にこぼれ出るのであろうか。

答えの出ぬままに歌宴は終り、即詠は宿題として、各々明日ありと思う心に散会となつた。

### 二 子供の眼と大人の心

或例会の日の話である。

大家の歌数首を鑑賞することにした。

「こんな歌を無名の私が出詠したとすれば良い歌だと褒められるだろうか」と、

質問者の指したのは土屋文明の何が食いたいと言はれて答容易ならず食いたいと思ふ物がないのだ

の有名な歌である。

さまざまの笑いが渦を巻いた。その渦の中では私はふと「裸の王様」の童話を思

い出し、「王様ははだかだ」と言った子供の純一無垢な眼を貴重なものと思った

と同時に、王様の過去の業績を知る大人たちの「裸でも王様は王様だ」と尊ぶ心も亦大切に思われた。

もちろん私は、大歌人土屋文明先生を裸の王様に喻えるつもりはさらさら無い。

俳

句

## 山崎俳句協会青嶺句会

藤家千代

### 竹田城跡を訪ねて

絶好の花日和に恵まれた四月十七日、和田先生御夫妻始め新しい句友さんも交えて私達十八名は胸ときめかせ但馬路へ

と向う。盛りを過ぎた沿道の桜に送られバスは分水嶺の町生野を越え見え隠れする円山川に沿い一路北へと走る。

行く程に季節はもどり桜は満開、折から花まつりの和田山町へ十一時前着。車窓に染井吉野、山桜、間を縫う白い辛夷

の花などを愛で乍ら県立自然公園への十九折を頂上へ。円山川の対岸遙かに竹

田城跡が望める園内は咲き誇る桜の大樹が並び花の雲さながら、春日傘の友もあり花筵や屋台の店等で賑わっていた。

花を跡に再びバスにて目指す竹田城跡へ、又々幾曲りかの急坂をあえぎ登つてやっと辿り着く。竹田城はその昔出石城の出城として十三年がかりで築かれたとか、屹立した山頂の出城としては、大手門、見付櫓、本丸、二の丸、三の丸等々の跡の石垣が山頂一杯に拡がり規模の大きさを偲ばせる。先の花の公園の華やぎ

に比べてこちらは堅固そのもの、彩る物と云えば足許の笹むらに咲いている一群の葦だけのが対照的であわれを誘うものがあつた。

山を下り良子様のご縁筋の中井屋旅館で昼食、窓に舞う花吹雪を眺めつつ、趣向を凝らした山海の珍味に土筆や菜の花も添えられ春の味を満喫し乍らも、皆心は句作を離れやらぬ面持ちで一時四十分投句、続いて選句、披講された。

鳴き下手の老鷺山に日もすがら

城跡は夢の跡なり桜散る  
間遠なる單線鐵路桜散る

咲くものに散るものに春惜しみけり

### 席題（即吟）について

山崎俳句協会青嶺句会

福田泊水

### 席題（即吟）

日盛りに出向く一つの意を決し  
中尾 悅生

云ひ勝ちて心は空し虫の声

淡き恋胸に抱きて卒業す  
永井とみ代

ひざを組み直して座る夜寒かな  
杉山美保子

寒星のまたたき多き通夜帰へり  
鳥羽チエノ

春立つや孫に越されし背の丈  
下村 君子

車窓より逃げ去る景や春惜しむ  
大谷 延子

石野 光栄

咲くも良し散るも亦良しさくら花

八重

一陣の風一刻の花吹雪

薰風

陽を追って蝶の憩ふる花の下

いし

散るさくら姫の悲恋の物語

南嶺

桜咲き大パノラマや竹田城跡

美保子

桜舞ふ竹田城跡夢しのぶ

チエノ

興亡は夢か城跡春深し

千代

緊張の中にも和やかに句会を終え余韻を胸にあたため乍ら竹田の町に別れを告げ、途中ドライブインで休憩、はりま屋

で見事なしだれ桜を愛で五時過ぎ帰着、恵まれた一日を感謝しつつ解散した。

葉跡の滝みし眼青目刺

原田小次郎

日盛りに出向く一つの意を決し

中尾 悅生

小夜嵐万朵の花も惜しみなく

千里

慶弔のこもごもありて松過ぎぬ

秦 春名

春の滝みし眼青目刺

寿女

春愁や言ひ出し難き事ありて

山口 栄子

でで虫の歩むはあてのある如く

藤家 千代

春愁や言ひ出し難き事ありて

山口 栄子

に句作に集中出来るので意外と佳い句が生まれる事が多いです。

青嶺句会では五十年近い長い間この席題は一回も欠かす事なく続けております。

平成六年度の席題句を紹介します。

実梅もぐ故郷遠く母在らむ

相振れて流灯傾きつゝ流る

秋久  
光子

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ほの暗き一光夜寒の路地を守る

芦田  
八重

福田  
泊水

七十路坂登らせ給へ臘月 西村 好江  
秋草やこ廃校の石碑立つ 原田 久代  
にはか雨金降る思い稻田かな

畠林 和枝

草を引く背に老鶯のひもすがら  
旅なれば派手な日傘も気にならず  
灯を入れてさらに優しき雛の貌

鳥羽チエノ  
永井とみ代

菊日和日記一行にて足れり  
国境を越えてひろがる大花野 薄木満寿恵  
虫時雨風の刻あり闇深し 川崎 栄子

### 山脈句会詠草

夏深し林道二本の轍ひく 池田 陶瓦

文庫本風がくりゆく昼寝時 宇野 幸子  
衣更へて鏡の中を歩きけり 岡田 瑞穂

校庭に幾年過ぎし夏木立 小倉れい子  
嬰兒も法被そろえて秋祭 尾崎すず子

大根播く明日と云ふ日が生きたくて 尾崎いつえ

秋暑しきしむ水車に和紙の里 垣口 翔人

女故母故哀しさくろ嘯む 小紫 いく  
飛びとびに又群れ咲いて曼珠沙華 高野 薫風

おだやかに波耀る浦曲秋祭 高野 しづ  
溝蓄麦の埋めて細し秋の水 小畑 柏人

喪帰りの念珠に宿る月臘 田中八重子  
六地蔵前掛赤く秋暑し 田中 恵

三角も四角もありて谷田植 萤飛ぶ夜空に星の降るごとく

牲川 信子

### 青嶺会句会詠草

くるくる寿司くるくる廻り日の永き

佳き事を綴り埋めだし初日記 芦田 八重

面売りの面をかぶりて秋祭 石野 光栄

閉ざされし雨戸の久しう秋海棠 大谷 延子

葉桜やあと一キロの道標 岸野 昭三  
余生尚燃ゆるものあり日記買う

下萌や工事現場の荒地にも 高野 南嶺  
銀河濃し遠くになりし戦火の夜

下村 君子  
藤井 七代

さわらび句会



幼児と折鶴に更く夜長かな

日毎濃く池にとどくや寒紫

山岸 園子

福田 泊水

藤井 七代

幼児と折鶴に更く夜長かな

日毎濃く池にとどくや寒紫

## 例会での講話から

昭和会 下谷厚

歳月の流れの早さを感じるこの頃です。

昭和会が結成されて三十八年、人の齢なら意氣盛んな頃で、毎月開く例会による勉強会も各層からの有意義な話を聞き生涯勉強であることの大切さを改めて知る想いです。

◆六月例会は、岡山県立美術館と大原美術館を訪ねる見学旅行に出かけました。

ハンガリー国立アダベスト美術館所蔵「ルネサンスの絵画」に、じかに接し感激でした。ルネサンスは、十五世紀から十六世紀にかけて、イタリアを始めとしてヨーロッパ各地に生起した大規模な文化活動で、その後ヨーロッパ文化の基礎となっていることはよく知られています。

北と南のルネサンス美術を代表する巨匠の名画七〇点が多彩な展開と豊潤な開花を一望できるような希な機会を得る。ルオーの道化師他を買い求め（はがき）大原美術館を後にしました。

◆光久寺月輪住職による木造不動明王立像と寺に残る古文書についての講話によると、仏像は、儀軌經典によって定められ、時代の古い程嚴格で、光久寺の不動

明王は定めどおり造られ、いささかのゆるみもないなんとなくかわいい感じじゅつる。平安という時代のせいかそれとも仏師の心なのか。寺は承安元年長野県

に創建され、現存する不動明王は、同年正月当時の管領加賀美円光が高倉天皇の病気平癒を祈りその恩賞として賜った。小笠原の称号を受け以後小笠原氏の家宝として長野、九州、龍野などの転封の際に大切に持ち伝えられ享保二年（一七一七）安富町安志に落ち着いた。寺に残る

古文書によると檀家はなく「加持祈祷」がお勤めで拾両、三両、銀六匁などの当時としてはかなり高い祈祷の記録がある。

祈祷は何百ある経典から願主の希望によってたちどころにその本地仏を呼び出し、修法すると云うから大変。それだけに加持祈祷料は高かつたのだろう。不動明王は、大日如来の使者で、一切の悪徳を降伏させるための化身である全身をお

おう火焔はインドの神話に出て来る想像上の怪鳥ガルーダの吐く炎だそうです。

光久寺は竹林を背に往時の寺領一万石を偲ぶすべもなくひつそりと建つ古寺、

淡々と仏縁と文化財（寺に残る古文書）に一人でも多くの理解者をと、うつたえる住職の姿には、不動明王の激しい性格とはどうしてもひとつに結びつくことはできなかった。

（国宝と文化財の話より）

「宍粟郡守令交代記」は元禄十二年（一六九九）に郷土研究を志した片岡醇徳が著したもので、山崎にとってたいへん貴重な郷土史料であります。

片岡醇徳は守令交代記の序文に「夫れ我郷にいにしへより守令交代綿々として徳が著したるもので、山崎にとってたいへん貴重な郷土史料であります。

今いにしへに稀なる年に二とせを過ぎ衰朽の身に到るまで守令の姓名・交代の事蹟を知らざり

しはいとほいなく思ひぬ……と書き出しており、七十歳を過ぎてからもなお、郷土研究への熱い情熱をもって本書が著

されていることがわかり、今は生きる私達にも共感を与えてくれます。

## 校訂播州宍粟郡 守令交代記 再復刻

山崎郷土研究会

大谷司郎

内容は、宍粟郡を中心とした領主の変遷を軸に歴史的事項が記載されていて、

昭和五十二年に発行された『山崎町史』にも参考文献として多く紹介されています。建武年間（十四世紀中頃）の新田義貞や、室町時代の赤松氏、戦国時代の長

福の大庄屋役を勤めた田住家の古文書の中から、最近になって見つかった守令交代記の写本をもとに再復刻しました。

本書の後半には、佐用町平福の庄屋役勤めた田住家の古文書の中から、最近になって見つかった守令交代記の写本をもとに再復刻しました。

A5判で七十五ページの本で、一冊七百円で発売しております。郷土研究会員にはすべて配本していますが、残部少ないなりておりますので、ご入用の方はお申込みください。

七十年間にわたっていて、特に醇徳が生

## 植物同好会の活動について

久宗丑雄 植物同好会長



繁盛地区でのカタクリの花の観察会（4月17日）

私たちの身近な春の草花、秋の草花の名前を知り、「自然に親しみ、自然を愛する心を持つこと」を目的に、十年前に植物同好会を発足させ、月一回の観察会も、ここに百回近くの回数を重ねることができました。当初の昭和六十年頃には会員も二、三十名であったが、今では百

枚の写真により、音水国有林の天然杉、寺のしだれ桜、赤西国有林のモミジ狩り等、遠い場所の時には朝より弁当持参で植物同好会を楽しんでいます。

七月二十四日にはバス一台貸切りで神戸六甲山高山植物園で観察会を実施し五十余名の参加者で、世界の珍しい高山植物の草花を観察しました。

毎回の参加人数も、三十名～四十名程度で、特に多数参加されたのは、今年4月十七日(月)の繁盛地区でのカタクリの花、ザゼン草の観察会には、四十台程のマイカーで八十余名の参加者でした。

宍粟郡内には自生していないと言っていた幻の草花、カタクリの花の数千株の群生地を三年前に一宮町の奥地で植物同好会員により発見され今年は二回目のカタクリの花の観察会でした。

町民の皆様方で植物の名前を知り、植物に親しみたいと思われる方は植物同好会に入会されることを歓迎します。

数十名にふえ、宍粟郡内はもちろん、遠くは明石、加西、高砂、加古川、童野、姫路、赤穂、佐用、新宮より多くの方が、月一回の観察会を楽しみに参加されました。

観察会は第一土曜日の午後一時に山崎小学校前に集合出発としています。

観察地により、音水国有林の天然杉、

戸倉スキー場でのザゼン草、南光町幸福寺のしだれ桜、赤西国有林のモミジ狩り等、遠い場所の時には朝より弁当持参で

実施しています。

宗教は、苦悩の中の熱情が創出した虚構だと人は言うかもしれない。過去の文化論を全く無視することが精神の軽薄さを示すとすれば、過去の文化論をそのまま採用することは、精神の怠惰を示すものであろう。戦後われわれの精神は余りに軽薄でなかつたなら余りに怠惰であったようと思われる。

仏教の思想がインドに起ったのは、周知の事実で、この実践を説いたのは釈迦おこなった禪の経験を基礎にして、解脱の理想的な境地に到達する修道方法として禅、八正道の教えを説いたのである。仏陀の入滅後、大乗仏教がおこると、利他の精神に立脚した、一連の行為として禅波羅蜜が強調され、禅によって獲得した知恵をもって他の人々の煩惱を断つていう利他的で能動的なものでなければならないと説いた。

瞑想を修行方法としての禅を中国に伝えた達磨の禅の思想は單なる瞑想をする

## 禅の思想について

朱山毅 山崎茶道研修会

禅ではなく「楞伽經」に説くところの如來禅、いいかえれば自分自身のための慈悲的な静寂の境地を求めず、衆生のために転迷開悟にとめるという利他的で能動的な禅を伝えにちがいない。達磨以後、弟子の慧可を経てご代目の弘忍のころまで「楞伽經」に説く如來禅の思想が中國にひろまつたであろう。そして中国人に強い実証実義とこうした禅思想とともに、「楞伽經」に説く如來禅の思想が結びついて展開するにたり、行住坐臥を離れない禪が唱えられるようになつた。達磨の禪にあっては、すべての人々が即心即仏を覚悟してかららず煩惱から離脱するということになるのであり、しかもそのことが行住坐臥の禪において可能であるとした。達磨門下の思想は六代の慧能のころにいたつて完成し、以来中國、日本の禪思想史を一貫して動かないものとなつている。

この中国の禪、達磨門下の禪が日本に伝えられるによよんでは、この思想をよく国民思想のうちに消化し鎌倉時代に道元のような禪思想の体系をみるといたつて、また禪思想が日本文化の成長に貢献した分野は広く日本文化から禪思想をのぞいてその文化の特質を考えることはほとんど不可能である。

## 日本伝統芸能

### 若者と邦楽について

山崎邦樂邦舞研究会

尾 島 忠 義

先日は福山司城先生の命寿の記念公演に際し、各流派の先生方、また後援会の皆様には大変お世話になり有り難うございました。この紙面をお借り致しまして和楽に限ったことではありませんが、尺八、三味線、琴、琵琶といった楽器はいかに正確な音色を出すかという事が最も大切だと思います。

「五十の手習い」と言う言葉もありますが、それにはやはり若い時から、耳を肥やしておくことが大切なことと思います。加えて正確な指の運びを長い年月をかけて練習することが必要であろうと思います。厳しい訓練が課せられるためか、西洋音楽におかされてか、今日、和楽器を習う若い人が極めて少ない事をとても残念に思っております。

私の師匠、福山先生は常々、山崎町より尺八の音色を消してはならぬとおっしゃつておられます。私もその通りだと思うのです。それには、芸能祭、文化祭も大切

な行事の一つと思っておりますが、各小学校や中学校に尺八、三味線、琴といつた楽器を置いて、じかに児童や生徒に触れてもらうと言うのは如何でしょうか。学校音楽の中に邦楽の単元もあるかと思いますが、きっと楽器の絵や写真を見るか、一、二曲鑑賞するぐらいでピアノやエレクトーンに押されているのが現状でしょう。

近ごろ、学校では、運動会に負けず文化祭も盛んになりました。そのような機会に、私達邦樂に携わる者を気軽に呼んで頂きたいのです。一曲でも、二曲でも参加させて頂いて、ジョイントコンサートが出来たら、どんなに楽しいことでしょう。その中から、若い人たちが、邦樂や邦舞に興味を持つ人が一人でも一人でも誕生することになれば、望外の喜びであります。

「日本の文化を大切に」と言いながらNHK、FM放送でもバロック音楽、クラシック音楽は一日六時間から八時間の放送があります。一方、邦樂の時間は一日四十五分の放送に過ぎません。これでは日本伝統音楽を知らない若者が増える一方です。常に日本の音楽を身近に聴けてこそ、自然に若者の心の中に浸透して、その良さに感動する人が増えてくること

も考えられます。

私も、若者に少しでも理解されるようボピュラー、ジャズ、演歌、といろんな分野の曲に、尺八で苦戦しながら挑戦しています。伝統芸能を大切にしながら、ありますが、今の私にとっては生きがいでもあるのです。

そのため、猛練習をしています。また、来年の五月はスクイム市国際音楽交流に参

加するため準備中です。

コーラスは、他のパートの人たちの声を聞きながら、美しいハーモニーをつくつていくチームワークの歌です。美しく、はもった時は、何とも気持ちのよいものです。どなたでもいつしょに美しいハーモニーをつくりませんか、本当に楽しいですよ。山崎町民合唱団で、宍粟の森混声コーラスで……お待ちしています。

### 私たちのハーモニー

山崎町合唱連盟

杉 本 邦 子

私たち山崎町民合唱団は、山崎町合唱連盟に所属し、毎週水曜日、夜八時より、聖旨保育園の一室を借り、練習をしていきます。

最近では、Y.O.B、安富町あじさいコラス、一宮町杉の実コーラスと共に宍粟の森混声コーラスとして、ボリュームのあるワイドな、しかも繊細なコーラスに音楽練習会場が設置されれば、山崎町の隅々までハーモニーが届き、明るいチムワーケのある町づくりになると確信しています。

テレビやラジオに於いても邦楽放送が余りにも少なすぎるよう思います。私たち合唱団の練習会場設置の願いを、この紙面をお借りし、お願いする次第です。町当局におかれましては、私たち数多くの合唱団の練習会場設置の願いを、この紙面をお借りし、お願いする次第です。音楽練習会場が設置されれば、山崎町の隅々までハーモニーが届き、明るいチムワーケのある町づくりになると確信しています。



十一月三日、安富町文化祭、十一月十五日、山崎町慰靈祭に、そして今は、十二月四日太子町での「西播磨音楽祭」出演

# 書の思い出

山崎町閉幕同好会

尾崎弘志

閉幕同好会の一員として思いのまま書いてみます。町内、郡内をとわず多くの同好会の皆さんにおられますのが誰でも初めて暮を持ち、初閉幕大会に参加した時の想い出があると思います。私は村役場に勤めて一年ほどたった頃、当時の村長さんは大変な閉幕爱好者だったようです。食後は短い時間にも拘らず、誰かに声をかけてはパチリ、パチリ打つておられました。そうしているうちにぞき見でしたのが、閉幕の始まりであります。それ以後は先輩の方々が当直になると、時間つぶしに誘われて、井目の置き碁で教えてもらいうちに碁のおもしろさを覚えたようでした。そうして夜は近くに普及員さんと、獣医師の方が、下宿されておられ、毎晩のように交互にお邪魔しているうちにやっと、七級ぐらいになつたようです。その後は、お盆、お正月は必ず村の公民館でお世話をしても対局出来るのが閉幕大会の初参加は、山崎町光泉寺でその時は、故前野四郎氏が受付でお

いました。しかし、今でもよく出てきます「役場の碁」。これは早打ちで勝負の数を稼ぐことを専とした碁で、有名でもあります。

現在私が参加しています碁会名をあげますと、郡内の方々が加入されている守拙会、山崎閉幕同好会、郡内町役場職員OB会、高下棋友会、三土棋友会、碁樂会等であつてなかなか多彩であります。

外にもあらゆる地域で多くの方々のグループがあるようですが、何と云つても年々参加者の減少が一抹の淋しさを感じさせます。ゴルフをはじめとして時の流れと共に、機動力をいかした趣味等範囲が広がる中で、余りめだたない、碁は若い人々には軽視されるのかと思いますが、一人でも多くの若い人に覚えていただきたいものと思っております。どんなに立場が違つた人とも対等に対局出来るのが閉幕のすばらしさであると思ってている一人であります。

世話ををしていただきました。大会の成績はB級で三位に入賞した時が想い出として残っております。その後は役場職員の皆さんとの昼休み、退院後の早打ち碁が盛会であります。最初のうちは毎月一回の碁会があつたが、その後は、自由な時に誰とでも対局してその成績結果によって、入賞等を決めていましたが、お世話をする人が続かず、いつしか消えてしましました。

しかし、今でもよく出てきます「役場の碁」。これは早打ちで勝負の数を稼ぐことを専とした碁で、有名でもあります。

現在私が参加しています碁会名をあげますと、郡内の方々が加入されている守拙会、山崎閉幕同好会、郡内町役場職員OB会、高下棋友会、三土棋友会、碁樂会等であつてなかなか多彩であります。

作家の意図が必ず表現されなければならぬ。作家の意図とは、何處かで見たような模倣に近いようなものではなく、自己自身の作り出した全く新しい作品である。大袈裟に言うならば、過去に一度も見たことがなく世界に二つと無い作家の個性とアイディアの滲み出た作品である。

このことを書道に置き換えて言うと、臨書と創作の二つのことが考えられる。

臨書とは、古典や師匠の手本を模倣して書くことであり、創作とは、全く新しいものを作り出すことである。前者は先人の生み出した芸術的価値の高い作品や、師匠が永年にわたって築き上げてきた感覚や技術をそつくり真似ることであり、後者は自己自身の築き上げて

# 臨書と創作

新潮会

田内龍暉

きた感性と技術によって表現した個性豊かな作品である。

模倣した作品と創作した作品のどちらに価値があるかは、ここで改めて言うまでもないことであるが、有名画家の臨画や、小説、詩歌等の文学作品に於いて模倣したり盗作があった場合は何程の価値もなく、厳しく批判されるところである。

書道を愛好する人で何かの手本を見て書くことは上手だが、自分で新しいものを作り出すとという創作活動の苦手な人がある。勿論模倣は易く創作は至難である。模倣(臨書)ばかりを中心とする人は、芸術家としての道でなく、職人としての道を歩むことになりはしないか?。

書の分野で臨書が重視されるのは、先人の生んだ偉大な古典を臨書したり、師匠の手本による臨書は技術的な修練を積む場であると共に学書の早道だからである。しかし、展覧会等での臨書作品は厳密に言えば本物の芸術作品の出品ではない。純粹な自己自身による創作作品の出合は、必ず○○臨と署名すべきである。○○書と署名する場合は、模倣や他の力を借りることなく明らかに自己自身の独力で書いたという署名である。地方展や全国展をより権威あらしめる為に十分考えなければならないことである。

## この一年を振り返つて

平成会

堀 勇 雄

平成六年十一月記

平成会が結成されてから、もう五年が経過しました。一昨年の五周年記念事業を終え、これまで振り返ってみると短いようでもあり、永いようでもあります。でも、五年余り続けて来たことはない意味で大変価値のあることで、時間を経なければ生まれてこない、会員の間の良い紳ができるいるのではないか。

新年度当初に今年は会員相互の融和を図ることを第一に、平成会の目的に少しでも近づくように、お互いの生活を楽しんで豊かなものにするために努力することを掲げ、月々の例会を行つてきています。小生がいちばん印象に残っている一つの例会を紹介しますと「収穫期待の農作業実践教室」を計画し、二月に「じやがいも栽培」、六月に「おいも収穫祭」と銘うつて、苗の植え付け、いも掘りまで会員の家族を総動員し、大人も子供達もみんな、それぞれ手袋、ゴム長靴、ムギワラ帽子をかぶりお百姓姿に変身し、普段使い慣れない、くわ、トンガを使い土まみれになりながら農作業を楽しみ、收

穫の喜びを味わい、穫れたてのいも料理、バーベキューと今まで忘れていた旬の時期を思い出したことです。

そして、月々の例会では、三月に中国文化を通して親睦を図る「麻雀大会」、岸での「潮干狩り」、五月はゴルフ初

心者、経験者を含め参加した新舞子海

四月には、家族を含め参加した新舞子海

文化を通して親睦を図る「麻雀大会」、

岸での「潮干狩り」、五月はゴルフ初

## 秀峯会より集杉会へ

山崎謡曲会

壺 阪 時

私等の謡曲同好会は秀峯会であります。が、その指導をしていただいていた横尾克リニック教室の開催、七月には「親と子の天文セミナー」受講、八月には、会員親睦の「道後温泉の旅」、九月には「瀬戸内海の海釣り大会」と、それぞれの例会も家族を含めいろいろな行事を行なうことで、友情を大切に、お互いの人生をみのり豊かなものにすることを考え実行に移していることは素晴らしいことだと思います。

これから行事として、ことし最後に山崎八幡神社において「大晦日のカウン

トダウノン」の行事をします。八幡神社の木々に閉まれた境内の暗闇のなか、白い息を吐きながら、参拝される方々、パチパチとはじける音、とぶ火の粉、大木の根っ子が燃えさかる焚き火を囲みながら熱い柏汁を皆様に振舞い、大変うけた行事を来年もと思っております。

私は新潮会、昭和会の先輩の方々に寄与し、お互いの友情を深め品性を高めようと思っております。

が、その指導をしていただいていた横尾先生が健康を害されたので、先生のお世話により、今度観世流の杉浦元三郎先生の御子息で、杉浦豊彦先生に指導していただきことになりました。

そんな事情から会の名称も先生の一字をお借りして「集杉会」と名付けました。

従来の秀峯会の会員の方々も幹事役の藤多克己先生のご努力により多数の方々が引続いて入会されることになりました。

私等が稽古をしているのは能楽の詞章の部分でありますが、それを通して此の部分であります。それはそれ相応の色々な要件があつたと考へられます。その一つは矢張り城下町であったと考えられますし、比較的都市部から離れた山間部に在るため地域文化が育ち易かったということもあります。

山崎は古くから謡曲の盛んな所ですが、それはそれ相応の色々な要件があつたと考へられます。その一つは矢張り城下町であったと考えられますし、比較的都

山崎は古くから謡曲の盛んな所ですが、それはそれ相応の色々な要件があつたと考へられます。その一つは矢張り城下町であったと考えられますし、比較的都

山崎は古くから謡曲の盛んな所ですが、それはそれ相応の色々な要件があつたと考へられます。その一つは矢張り城下町であったと考えられますし、比較的都

りませんが、能楽が一種の歌舞劇であり、樂劇であり、今日のような形として成立了のは十四世紀後半から十五世紀にかけての南北朝時代から室町時代とされているようなことから、わが国の古典芸能といわれる所以であります。

そしてその先行芸能として、田楽、猿樂、呪師などがあり、特に猿樂は奈良時代からあつたようであります。

特に足利義満の時代に現れた観阿弥、世阿弥親子の出現によりいちじるしい発展と大成をとげ、そして観世父子によって観世流の能が確立するようになりました。

私等が稽古をしているのは能楽の詞章の部分であります。それを通して此の部分であります。それはそれ相応の色々な要件があつたと考へられます。その一つは矢張り城下町であったと考えられますし、比較的都

# 河野鉄兜の鶴亀の詩は御祝の詩ではなく勤王討幕の詩であつた

山崎詩舞道連盟会長 小川登

## 咏 亀

河野鉄兜

庭無雑樹只梅松 山象蓬萊雲氣濃  
中空綠毛希世瑞 春沙日暖曇蒙茸

解釈 この詩は題名が「咏亀」であるが、詩の中に亀を意味する語は一つも出て来ない。詩の表面には梅、松、蓬萊、春沙

日暖と、目出度そうな字句が並べてあるだけで、詩文にもなっていない。

然し、其の裏には河野鉄兜の儒者としての信念に基づく、烈々たる勤王討幕の思想理念が隠されているのである。

起句の庭に雑樹なく、只梅松のみとは、華表歸來度幾秋 是非休管人間事

欲將懲相問浮邱 一夜紅霜點白頭

解釈 この詩も咏亀と同様に題名は「咏

鶴」であるが、鶴の事は一言も書かれていない。この詩は安政の大獄で多くの同

志が、首を刎られた無念さを詠つたものである。

承句は、山は蓬萊を象り、雲氣濃しがある。蓬萊は仙人の住む東海の島、日本國を指しておあり、雲氣濃とは漢書高祖紀の「季所レ居・上常有二雲氣一」季は（末）おはりを言い。國運の傾く時世には、上空に常に雲氣（雲）が懸っている

の意。

転句の中空の綠毛は世に希な瑞なりとは、空に懸った雲は、年老いた亀の甲に

生える緑色の苔（幕府を指す）であって、時世の変革の起る瑞である。

結句は、春沙日暖くして、蒙茸（モソヨウ）に曇す。

春さきの暖かい日射の中では、十八史略、西漢の寓話。漢の高祖と張良の話のようだ。蒙茸（雜草）即ち庶民は謀反の相談をしていますよと結んでいる。

華表とは宮門を意味し、京都へ長年に亘り、何回と無く往来をして、謀事を立て、将に空に浮かんだ丘。討幕の狼烟を上げようとした時（咏亀の中空の綠毛と対比）、管人（幕僚の長）井伊直弼の為に、安政六年十月二十七日の霜を真赤に染めて、一夜の中に勤王の熱意に燃える志士達が、刑場の露と消えて行ったと詠じている。

註 河野鉄兜・林田藩校敬業館の教授と志士達が、刑場の露と消えて行ったと詠じている。

言うより、芳野三絶の秀「山禽叫断」の作者として有名。山崎闇斎を敬慕した歌かけてぞたのむ垂加（シナフ）の神」

宇原の獅子舞

保存会代表

志水正信

去る十月十日は氏神様である岩田神社の秋まつりでしたが、町の民俗無形文化財の指定をうけている獅子舞を三年ぶりに奉納しました。

あいにく午後天気が急変したので、十種目あるうち八種目しか舞わす事が出来なかつたけれども久々の出演とあって観客から絶賛を得ました。



山崎南中学校にて



岩田神社にて

# 書と私

美術協会

## 山部桂子

(桂翠)

神戸で生れ、戦争のため、父の郷里である山崎に帰つて、早五十年となりました。子供の頃、字をきれいに書きたいとの思いで始めた習字、この地でお世話になりました井口滋子先生の御紹介で、郡の御出身で芦屋にお住まいだった山本御舟先生に御指導していただくこととなりました。これが生涯、書の道を歩くことになります。これが生涯、書の道を歩くことになります。運命の不思議な巡り合わせを思はずにいられません。白紙の状態で芦屋にお伺いするようになつた私は、ただ夢中で書き、通い続けました。消極的な性格で、あまり展覧会活動に興味を持たなかつたのですが、先生のお導きで出品する事となり、日展入選、そしてN H K の婦人百科の書道に先生と御一緒に出演させていただいた事など、今では、走馬燈の様に懐しく思い出されます。

書には、篆隸、楷行、草、仮名、など色々な種類があります。私の制作の主体としている、仮名は、平安朝時代に生まれ優美で、しかも氣品があり、数多い古筆は、學習の基調となつております。

小字作品は、古典を臨書し、形、線を学びます。細くてもキリット引き締まつた線は美しく、遅速、緩急自在の動きによって生まれる線の冴えを追求してゆきます。又、墨法の美しさも大切で、特に中字、大字作品では、淡墨、濃墨、そして潤渴など、壯美、優美、枯淡と、様々の美が要求されます。古筆を研究し、造形の面白さなど、ディフォルメしながら、それぞれの持ち味の中、これらを如何に作品の中に取り入れることが出来るかが、課題となります。

また、素材(和歌、俳句)をどの様に表現するかも大きなポイントとなります。書作は巻子、帖などは別として、一気呵成に書き上げることが多く、精神的な内面の充実に、大きく作用されますので、それまでの推敲、練度がとても大切なことなのです。そして心を無にする事が、理想の境地です。

書作ばかりでなく、すぐれた美術品や伝統的な建築物の美などを鑑賞する事により、常に目を養い、感動、感激する心を失わずに行きたいと思っております。

すぐれた書家、日本芸術院会員、村上三島先生(漢字)日展審査員、桑田篤舟先生、桑田三舟先生、山本御舟先生など諸先生には、誰にも真似の出来ない作風があります。この様な立派な先生方に、御指導いたることが出来ましたことを

深く感謝致しております。

そして何時の日か、少しでもよいものが書けるようにと念じつゝ、この奥深い道を歩んでゆきたいと思っております。

## たかがさつき

瀬戸口正信

播磨さつき会

さつき研究の為山崎へ来て三年、近年

にないよい選択のさつき会研修視察が出来そうなので十一月七、八日の両日参加

する。好天気に恵まれ総勢二十二名、七日は日本さつき盆栽交易中心を視察、

正倉院展見学、万葉植物園、春日大社、東大寺を経て共済会館やまとで一泊、翌日日本サツキ盆栽交易中心を訪ねる。

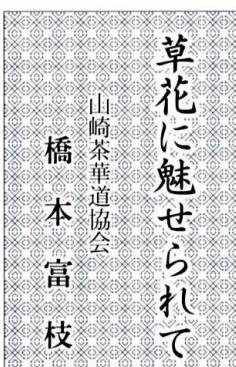
韓国、アメリカ等は事務所を置き、サツキ盆栽を世界的視野に立って宣伝普及を図り、国内に於いても沈滞しているサツキ界に新風を吹き込み、普及、活動し

ておられるよう見受けた。正倉院展では公開された七十四点の正倉院に伝わる宝物を通して、シルクロードに象徴される東西文化交流の足跡を身近に見聞、当時の社会の断片をかいま見る事が出来感概深いものがあつた。

八日櫻原神社参拝、カツラギ園芸センターを経て、奈良サツキ交換会を視察、山崎へ午後五時に着く。その日のサツキ会の研修視察の目的と常日頃の反省の上に立って、町花サツキの普及と花季展、即売会のあり方に就いて、私なりの立場で少しふれてみたいと思う。山崎に転入まだ岡目八目的な立場で眺められるだけに、冷めた部分と、熱いまなざしで、さやかでもよい夢よもう一度を分析してみたい。かつての山崎のさつき祭りを知っている私にとっては、転入してみると、予想以上に花季展即売が低迷している事に危惧の念を抱き、この儘行けばの感を深くしている。サツキを象徴した催物は、花季展、即売に始まり、全国規模のさつきマラソンや、その他の行事が盛大に行われているのは周知の通りである。それら諸々の行事もサツキがあつてこそ始め出来た催しであつた筈である。他の市町村のようにたかがさつきと傍観出来る程、山崎にとっては価値観、存在感の大いされどさつきである。しかし現在はサツキと言ふ言葉だけが一人歩きしているよりも思える。このような情勢を乗り越えるにはどのような対策が必要かサツキは下火になっている中で、鹿沼では生産調整はしているものの、毎年苗が需要に追いつかない品種もある。確実に売れている証拠である。生産地との情報交

換も必要であり、時代の先取りが即売場でも要求されている。盆栽に関しては奈良交換会を観察して分かるように二流以下の樹は驚く程の低価格である。一流品は昔と変わぬ値で店頭に飾られている。花物にせよ盆栽にせよ、いずれを当事者は選択するか、熟年者に申したいのは、若い層が後継者が育たぬと嘆く前に、若い層が入れるような、夢のある雰囲気作りをする事こそ急務ではないだろうか。

下火の時の充実を忘れてはならない。時計の振り子は必ず返って来る。下界は高所に昇った時よく見える。自然を愛する心豊かな町民の理解と参加を得て、町のシンボル、サツキの看板を泣かす事のないよう期待したいものである。



私は道端に咲いている草花が好きで、よく小さな花入れに挿して楽しんでいます。何の花でなくはならぬと言う事もないし、何の葉でもよいのです。曲がついてても枯れても、それはそれなりに魅せられるものの様に感じられるからかもしれません。それにより私の心を和

ませる何かをその中に秘めているのかもしません。

それがとても気持ちよく思えたのは見知らぬ人が立ち寄られて「草花って楽しですね」と声をかけられた時で、その時の顔がとても印象的に思えたのです。

草花にはその時々のさまざまなそのものの自体の魅力と共にその周囲の空間をやわらかく抱えこむ神秘的な何かをやどしているように見えます。そして、それは、どうこうと考え得られるものではなく、ただ、そこに手を加えることなく、挿してあるという自然のもつ美しさからくるものではないでしょうか。

私は、日常生活の合い間に折りをみて草花を搜して歩くことが好きです。そして、たまたま、美しく咲いた草花に出会った時の嬉しさは、又格別です。

多くの人々は、皆、このような楽しみを想像しているのかも知れませんが、今の世代はいろんな装置を凝らしたものになれて何となくあたりきりとなってしまつたのではないか。その忘れかけていたものに何か親近感を覚える今日、この頃です。



## おどりへの追憶

さつき民謡グループ

北川政子

深まりゆく秋の日に

故大谷政子先生のご冥福を祈りて

優雅な舞の数々をこの世に残されてあ

の世へ旅立たれてから早三年の歳月が流れました。何時もお優しい笑みを湛えて、

お稽古して下さいました。お年寄りへの

慰問、文化会館での芸能祭への参加。ま

た十一月三日の秋のふれあい文化祭が開

かれるたびに先生のおどりへの情熱にお

応えしなければとお稽古しましたが…。

きりっとした先生の槍をお持ちになった

男舞のお姿が今も心に残っております。

亡くなられた後、坂東寿賀幸先生にお稽

古をして頂くようになり、お若い滌刺と

した手さばき、足さばきに魅了され昔

なつかしい民謡のおどりに励んで参ります。

西川さんのお孫さんの可愛いおどりも、

大谷さんの提案の衣裳で花をそえて素晴らしい

さつき民謡グループの誇りに思

います。

菊の香匂う日におどりへの追憶は果しな

く先生始めグループの方々の優しさに包

まれておどりの輪に一日も早く自分を見

つけたいと願っております。

今になつて一人舞を習っていたらと痛感しています。何故!! 主人は尺八、娘は三味線、お琴と身につけておりますのでその伴奏で私も踊れたらどんなに楽しかった事と悔やんでおります。私の踊

りの歴史は長く、亡くなつた姑も心よく夜お稽古に行かしてくれました。八木時計店の亡くなられた奥様との出会いからで、昔の長生会館で習いました。その頃は健康体操とか、カラオケ等なく、おどりのみが趣味でした。商工会のおまつりで紫頭巾をかぶり花笠持って町を一周したこともありました。

八幡神社での奉納おどり、敬老の日のお稽古で下村記念館での慰問!! 踊りへの思い出は年を重ねる程懐かしくなつて参ります。私がお休みしている間も大谷さんが何かと細々と報告して下さつて感謝しています。グループの方々にお会いすると早くおどりに来てね」とお声をかけて頂き嬉しく思っております。

## 事務局便り

☆ 春の芸能祭

五月十五日 山崎文化会館大ホールで開催。15回の節目を迎えた芸能祭だったの観客増を一番の目標に準備をすすめました。折角、芸能関係団体の方々が猛練習を重ね、その成果を発表して下さるのだから出来るだけ多くの人に観賞してもらいたい、山崎町の芸能の評価をしていただこうというのがネライでした。そこで老人大学かしわの学園にお願いして学生の皆様の観賞を依頼。さらに、新しくお楽しみ抽選会を開きました。このことが功を奏し、観客は延べ千人を越え、出演者には一段と張り切った演技を披露していました。平成7年の16回芸能祭はただけました。山崎文化会館大ホール5月14日(日曜)山崎文化会館大ホールで開く計画です。

☆ 但馬の理想の都の祭典へ研修ツアーハー

6月25日に実施。豊岡市で“大田馬展”・但馬空港で“空の文化展”・香住町で“海中公園展”・村岡町で“森の文化展”を見学しました。平成7年も、研修ツアーハーを計画します。ご参加をお願いします。

☆ 秋のふれあい文化祭

十一月三日 山崎文化会館で開催。播州山崎太鼓の会員が初出演して勇壮な太鼓の技を披露して下さいました。

誌上をかりて厚く御礼申し上げます。

## 編集後記

編集委員の方々によつて編集を終える

のが師走、ゲラがまわって来て、鳩首校正するのが一月の半ば、インクの香も新らしく出来上がって来るのが二月の末。

それから反応を見て、やつと一同不安から開放される。気候も丁度、長い冬のあと春は名のみの”といった頃です。

いつものことながら各団体から貴重なお便り、随想をお寄せ頂き、衷心より厚く御礼申し上げます。

嬉しいニュースがあります。それは、

昨年十一月に新宮町で催された“94地域文化を考えるシンポジューム”で県下各市町の文化活動の中で最も優れた市町二つの中の一つに我が山崎町が選ばれたことです。当日参加された壇阪会長をはじめとして大変面目をほどこしました。これも意図してその様な成果が得られたといふものでなく、皆様方の平素の文化への情熱と深い理解によつて、期せずして得られたものとご同慶に堪えません。

今回は、安井道夫氏の韓国に於ける我々にとっては全く未知の民族感情の世界を鮮やかに描き上げられた作品や町悦子氏を始めとし、特別寄稿として、町出身の谷口清作・河本泰両氏の貴重な体験に基づく玉稿を頂き、有り難うございました。

編集長 荒木俊介

□A機器・事務用品・スチール家具  
学校設備品・理化学機器・楽器

# イトーオフィスサービス 株式会社

(旧社名 伊藤文具)

代表取締役 伊藤 勉

山崎町中央商店街 TEL(0790)62-0126

創業明治28年・さつき本舗

# 四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を



御菓子司



本店：播州山崎町さつき通り (電)62-0170  
山田店：播州山崎町山田 (電)62-0160



人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んであります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

# TOBIISHI

飛石機械産業株式会社  
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.  
for happy day happy life

飛石建機 Dept.  
飛石機械産業株式会社  
TEL(0790)62-3700

トビイ仕印 Dept.  
飛石機械産業株式会社  
TEL(0790)62-3810

CREATIVE dept.  
飛石機械産業株式会社  
TEL(0790)62-3820

飛石レジスター部  
飛石機械産業株式会社  
TEL(0790)63-4022

飛石レジスター部  
飛石機械産業株式会社  
TEL(0790)62-5411

## ◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ  
良い品を・安く・安心して買える店



# フジアキカメラ

Specialty Camera Shop

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790)62-2089  
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

## 料理旅館・割烹

創業  
文久元年

# 菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287

TEL (0790) 62-1119(代)

# 寿

幸せへの旅立ちに――。

# ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181

本店 TEL(0790) 62-0052  
咲ランド店 TEL(0790) 63-0565

—Guide To Multimedia—

**NEC**

# 兵庫日本電気株式会社

本 社／兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地

TEL (0790) 62-1222

姫路営業所／姫路市南畠町2-1(安田火災姫路ビル8F)

TEL (0792) 22-0111

地元にひろがる

心のふれあい

**にしん**



## 西兵庫信用金庫

理 事 長 菅 原 杓 夫

本醸造  
龍神

しぼりたま

ふるさとのお酒

清酒 山陽  
盃

確かな品質

サンヨウハイ

純米酒  
一献

山陽盃酒造 TEL (0790) 62-1010(代)

\*安全で快適な生活をお届けする\*

JOMO 株式会社ジャパンエナジー特約店

**ホンジヨウ**

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 63-1234(代)  
(0790) 62-4321(代)